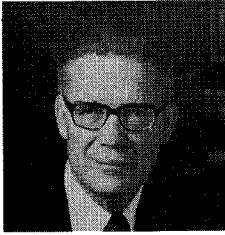




# 聖徒の道 5 1981





末日聖徒イエス・キリスト教会

大管長会

スパンサー・W・キンボール  
N・エルドン・タナー  
マリオン・G・ロムニー

十二使徒評議員会

エズラ・タフト・ベンソン  
マーク・E・ピーターセン  
リグランド・リチャーズ  
ハワード・W・バンター  
ゴードン・B・ヒンクレー  
トーマス・S・モンソン  
ボイド・K・パッカー  
マービン・J・アシュトン  
ブルース・R・マッコンキー  
L・トム・ペリー  
デビッド・B・ヘイト  
ジェームズ・E・ファウスト

顧問

M・ラッセル・バラード・ジュニア  
ローレン・C・ダン  
レックス・D・ピネガー  
チャールズ・A・ディディエ  
ジョージ・P・リー  
F・エンツィオ・ブッシュ

国際機関誌

編集主幹:

ラリー・A・ヒラー

編集副主幹:

デビッド・ミッチェル

子供の頁編集:

ボニー・ソーンダース

デザイナー:

ロジャー・ギリング

制作:

ノーマン・ブライス

も く じ

みたまの声.....マリオン・G・ロムニー.....1  
個人に与えられる啓示を受けるには.....ブルース・R・マッコンキー.....4  
バプテスマを40年待ちました...ベシー・リーパー・ヨーカム.....10  
子供に「死」を語り聞かせること.....ジョン・M・テイラー.....13  
みんなて話そう.....16  
エセル.....スーザン・H・エイルワース.....20  
ウイルフォード・ウッドラフ.....21  
鉄の棒.....F・パートン・ハワード.....22  
ビー玉.....ローリー・J・ウイルソン.....25  
1500キロの荒野をはだして.....ハル・ナイト.....29  
名前が何と変わっても.....ジャネット・ブリガム.....33  
迷路バスル.....マックスウェル・T・ストーン.....36  
厳しくも快い戒め.....ニール・A・マックスウェル.....38  
ローカル・ニュース.....44

聖徒の道 5月号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京都港区南麻布5-10-30  
印刷所 株式会社 精興社  
配 送 東京ディストリビューション・センター  
東京都世田谷区上用賀4-9-19  
定 価 年間予約2,200円  
海外予約2,200円

INTERNATIONAL MAGAZINE PBMA 0573 JA Printed in Japan

郵便振替口座番号 東京0-41512

口座名 末日聖徒イエス・キリスト教会  
東京ディストリビューション・センター

## 大管長会メッセージ

ブリガム・ヤング大管長がこのように述べたことがあります。「私はこの教会が設立された頃、この教会は広まり、繁栄し、成長と発展を遂げていくが、それと同時にサタンの力も大きくなるという啓示を受けた。」( *Discourses of Brigham Young* 「ブリガム・ヤング説教集」 p. 72 )

私たちはこの予言の成就を目の当たりにしています。

1938年の教会はステーキ部数 126、伝道

部数36、会員数78万4,764人でしたが、1977年末にはステーキ部数885、伝道部数158、そして400万近くの会員を擁しています。この事実は、ここ40年の間に、教会が広まり、繁栄し、成長と発展を遂げてきたことをはっきりと証しています。

サタンの力も大きくなるというヤング大管長の言葉の成就として、私たちは至る所でサタンが猛威を奮い、教会がその使命を遂げるのを妨げようとしている姿を目にしています。

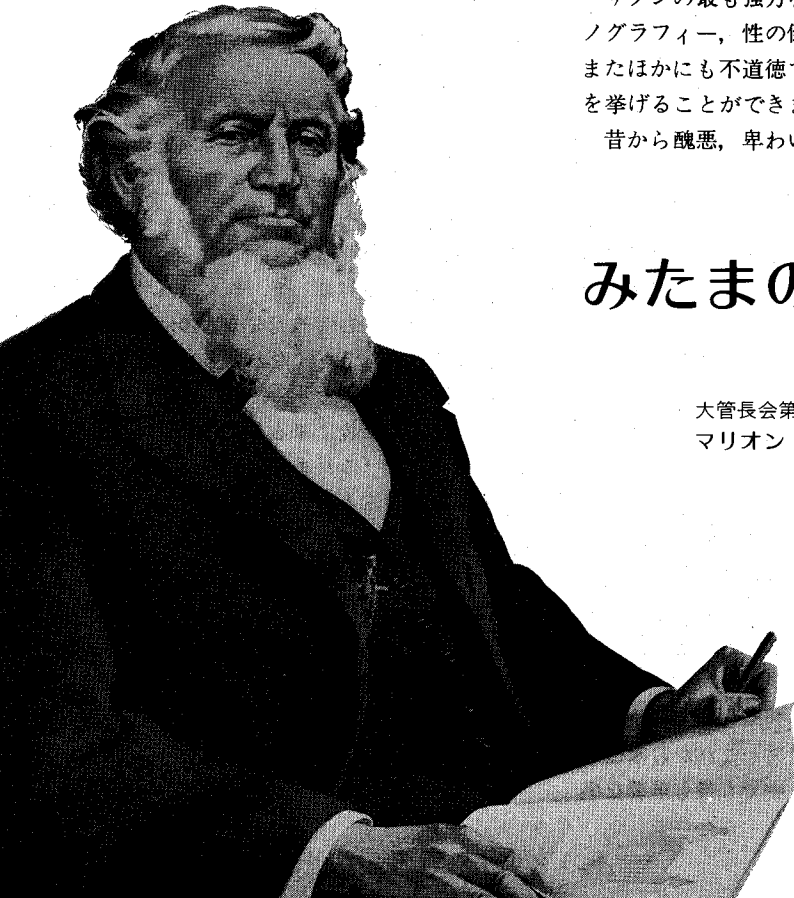
サタンの最も強力な武器としては、ポルノグラフィ、性の倒錯、生殖の力の悪用、またほかにも不道徳で汚れたあらゆる習慣を挙げることができます。

昔から醜悪、卑わい、低劣、場合によっ

## みたまの声

大管長会第二副管長

マリオン・G・ロムニー



ては不法と見なされ、いつの時代にあっても人を滅びに至らせてきた諸々の習慣も、この墮落の道をたどる社会にあっては、逆に人々の意にかなうものとして唱道され、広く受け入れられているのです。

私たちはこういう類の邪悪な教えや習慣によって欺かれたり、墮落させられたりしてはならないし、その必要もありません。自分が何者であるかを思い起こし、またそうした教えや習慣を識別し遠ざけるために主が授けたもうた手段を用いるならば、動じることはないでしょう。

次のことを肝に銘じておきましょう。

私たちは朽ち行く骨肉の体に不滅の霊を宿した、霊の結合体であるということ、

私たちは不死不滅の天の両親の霊の子供であるということ、

私たちがこの死すべき現世にある第一の目的は、主が命じたもうたことを行なうかどうかを試されることにあるということ、  
(アブラハム 3 : 25 参照)

私たちはこの現世にあつて、拮抗するふたつの力、すなわち、ひとつはサタンとそれに追隨する者たち、そしてもう一方はキリストとそれに従う者たちの影響下にあるということ、

私たちはこれらのふたつの力の影響を受けており、「万人に為したもうメシヤの大いなる賢い仲裁によって自由と永遠の生命とを選ぶか、または悪魔は万人が自分のようにみじめになることを求めているから、その束縛と力とに由つて定まる束縛と死とを選ぶか」(II ニーファイ 2 : 27) は自由であるということなのです。

何が善で何が悪かを判断しながら物事を選択することが、私たちがこれから永遠に繰り返していく決断の中でも最も重要な事

柄であるということを中心に留めておくことは大切なことです。

私たちのこの世から永遠にわたつての幸不幸は、そうした選択に依存しているのです。

父なる神と、その愛子である私たちの贖い主イエス・キリストは、多くのことを自ら決定していかなければならないこの現世に、善悪を区別する手段を与えずに私たちを置くということはされませんでした。これは当然のことですし、理にかなったことでもあります。神が私たちに授けたもうた手段とはみたまの声です。そして、それにどう耳を傾けるかということが、私たちに課せられた責任なのです。

主はそれについて次のように述べておられます。

「われ今汝らに一つの誠命を与えて汝ら自らを警めしむ。すなわち汝ら永遠の生命なる言に勉めて心を留めよ。

そは、汝ら神の口より出るすべての言によりて生くべければなり。

主の言葉は真理にして、およそ真理なるものは光なり。およそ光なるものはすべて『みたま』にして、すなわちイエス・キリストの『みたま』なり。

『みたま』は世に来るあらゆる人々に光を与え、また『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照すなり。

この『みたま』の声を聴くすべての人は神に来る。すなわち、御父の許に来るなり。

御父はこの者に、汝らに新に結びて確認したまいし誓約を教えたもう。而してこの誓約は汝らのために確認したまいしものなれども、ただに汝らのためのみならず、また全世界のために為したまいしなり。

されど全世界の人々は罪の中に伏し、暗

黒と罪のかせとにうめき苦しめり。

これに由りて汝らは、彼らが罪のかせの下にあることを知るを得。そは彼らわが許に来らざるによりてなり。

およそわが許に来らざる者は罪のかせの下にあればなり。

またわが声を受け入れざる者はわが声を知らず、故にわれに属ける者にあらざるなり。

これに由りて、汝ら義しき者と悪しき者との区別を知り得ん。然も、全世界の人々は今なお罪と暗黒との下にうめくのを知り得ん。」(教義と聖約84：43—53)

モルモンは善悪を見分けるにはどうしたらよいかをはっきり述べています。

「それであるから、私の愛する兄弟たちよ。慎んで悪いものを神から出たと思っではならない。また善いもので神から出たものを悪魔から出たと思っではならない。

私の兄弟たちよ。あなたたちは善悪を判断する自由と権利を与えられているばかりでなく、その判断の方法は真昼と暗夜とを区別するように、過りなく完全に知れるほど明らかである。

すべての人々はみな善悪の区別を弁えるためにキリストの『みたま』を授かる。さて今私は判断の方法をあなたたちに教えよう。善を行えとすすめ、またキリストを信ぜよとすすめるものはみなキリストの権能によってその賜として来るのであるから、それが神から出たことは何の疑いもなく充分確に知ることができる。

これに反して悪をせよと説きすすめ、またキリストを信ぜずこれを否定し神に事えるなど説きすすめるものは何でもみな悪魔から出たと言うことは、何の疑いもなく充分確に知ることができる。なぜならば、悪

魔とその使いたちまた自分から悪魔に従う者たちは、このように働いて誰一人にも決して善いことをせよとすすめないからである。

さて私の兄弟たちよ。あなたたちは判断をするに用いて力ある光、すなわちキリストの光を知っているから判断を誤らないように注意せよ。あなたたちがほかの人を見る時と同じ判断であなたたちも判断されるからである。

それであるから兄弟たちよ。私はあなたたちが善悪を弁えるためにキリストの光をもって熱心に探すことを乞い願う。あなたたちがもし一切の善いことをつかんでこれを拒まなければ必ずキリストの子となる。」(モロナイ7：14—19)

古今を問わず、こうした聖典の中の教えに照らして考えてみると、次のことがわかります。すなわち、イエスとその予言者たちの教えをよく学ぶならば、心の正直な人ならだれでも、私が今述べてきた墮落した行ないが主の目には非難されるべき忌まわしいものであることを理解するだろうということです。それは、十戒や山上の垂訓、近代の啓示に一致しないことがすべて非難されるのと同じです。

平安はイエスとその予言者たちの教えを学び、実践し、またキリストのみたまの導きを識別して、それによく耳を傾けることの中に存在します。そしてキリストのみたまは「世に来るあらゆる人々に光を与え、また『みたま』はその声を聴く全世界のあらゆる人々を照らすなり。

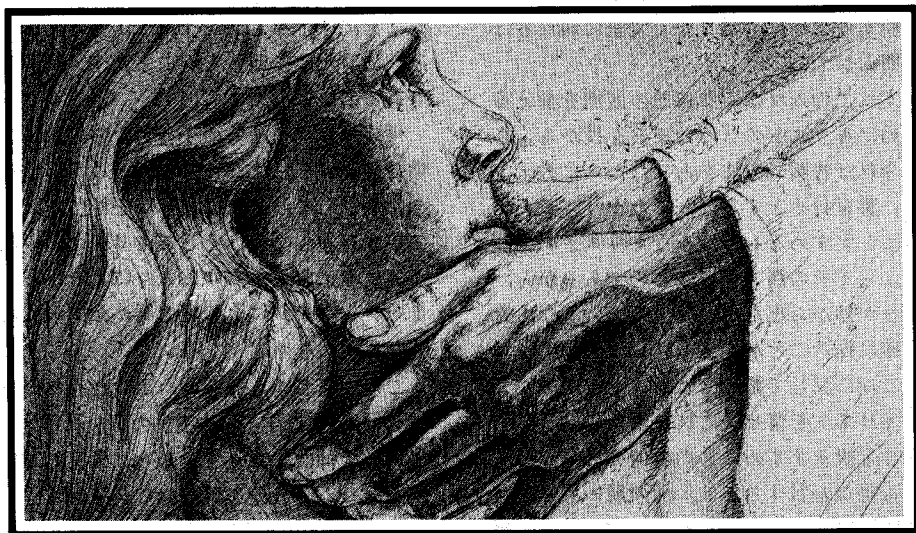
この(邪悪で、罪深い、汚れた行ないをすべて遠ざけ、)『みたま』の声を聴くすべての人は神に来る。すなわち、御父の許に来るなり。」(教義と聖約84：46—47)

# 個人に与えられる啓示を 受けるには

十二使徒定員会会員  
ブルース・R・マッコンキー

**私** はここでみたまに関する事柄について、  
また私たちが「自己の救の達成に努め」  
(ピリピ2:12)、この世では神の王国の立  
派な一員となり、後の世では永遠の報いを  
受けるにふさわしくなるために欠かせない  
基本的な事柄について話したいと思います。

また個人に直接与えられる啓示を受けるこ  
とに触れて、どうしたら個々の教会員がこ  
の業が神のみ業であることを知り、みたま  
のささやきを心と霊に受けることができる  
のか、さらに示現を目にし、天使と語り、  
主のみ顔を拝し、あらゆる時代において忠



実な人々の上に注がれてきたすべての知識と知恵とを得ることができるのか、それらの方法について話してみたいと思います。

私たち主の民は、末日の啓示を信じていることを口癖のように言います。天が開かれ、神が私たちの時代に語られ、天使が人人に恵みと導きを施し、示現と啓示が存在し、そして古代の人々が受けていた賜がとどめおかれることなくすべて私たちに与えられていると宣言しています。

しかし、私たちがこのように話す時、それはジョセフ・スミスやブリガム・ヤング、あるいはスペンサー・W・キンボールの体験を念頭においてるのが普通です。私たちは使徒や予言者について考えています。彼らのことを思い浮かべ、啓示の原則によって管理運営されている教会について考えているのです。

私たちが属している組織は、文字通り主の王国であり、主の王国は私たちに日の光栄の王国に昇栄する備えをさせ、その資格を得させることを目的としています。しかもこの教会は啓示によって導かれます。これらのことに疑問の余地はありません。私は使徒の職にある兄弟たちの集会で、幾度か地上における神の予言者がへりくだって燃えるような証を述べるのを聴きました。その中で予言者は、私たちを隔てている幕が薄いこと、主が教会の諸事を導いておられること、そしてこの教会が主の教会であり、主がそのみこころを私たちに顕わされることを証しました。

この教会を導く大管長には靈感が与えられ、教会はその務めを果たしつつあります。主が望んでおられる道をたどって教会は進

歩発展し、その結果、私たちの力の及ぶかぎり急速な勢いで、主のメッセージが世界中の神の子供たちに伝えられ、王国の一員である私たちが自らの生活を清めて完全なものとし、今もとこしえにも至上の祝福を受けるにふさわしい状態に到達できるようになったのです。

しかし、啓示は地上における神の予言者に限られたものではありません。教会幹部だけが永遠の示現を受けるわけではないのです。啓示はすべての人が受けるべきものです。

神は人を偏り見る御方ではありませんから、神の前ではすべての人が、指導者として召されている人とまったく同じように貴重な存在です。神は永遠普遍の律法に基づく様々な原則によりみ業を進めておられます。したがって、その律法に従う人であればだれでも啓示を受けるにふさわしい者となり、キンボール大管長が知っておられることを正確に知り、ジョセフ・スミスのように天使と語り、霊にかかわるあらゆる事柄に対して完全に心を調和させることができるのです。

予言者ジョセフ・スミスは次のように述べています。

「自分以外の人々が味わった経験や啓示をいくら読んでも、それは私たちが置かれている状況や神と私たちとの関係について真の理解を与えてくれるものではない。このような事柄に関する知識は、神がこの目的のために定められた律法を体現することによってのみ与えられるのである。5分間目を天に向けていれば、その件についてこれまでに書かれたものをすべて読んだ場



合に得られる知識以上の知識が得られるであろう。」(Teachings of the Prophet Joseph Smith 「予言者ジョセフ・スミスのお教え」 p.324)

今私たちが考えていることは、個人が直接啓示を受けることです。つまり、自分が抱えている問題について、あるいは教会に関することについて、自分自身で主のみこころとみ旨を知るのです。

知識には、知的なものと霊的なものの2種類があります。学校で学ぶ知識は主に知的な分野に属しています。このような知識は、おそらく知覚を通して理性によりもたらされるでしょう。

これは絶対に欠かすことのできない大切な事柄です。私たちは、進歩成長して悟りを開き、生活を向上させたいと願うすべての人々に対して、知的な分野の知識を増し加えるようにお勧めしています。

しかし、私が提案したいことは、もっと多くの時間を霊的な知識を追求するために用いる必要があるということです。霊的な物事を取り上げる場合、それは単に理性や知覚によって得られるものを対象にしているではありません。私たちは、啓示について考えているのです。私たちは霊の波長を神の永遠のみたまに合わせることにより神に関する知識に到達しますが、どうすればそのようになれるのか、その方法を習得することについて考えているのです。これこそ、個人に啓示がもたらされる経路であり、方法です。

もしある人が知的な分野における知識だけをもとにして教会や教義上の諸問題について評価を加えるなら、私はあまり関心を

持ちません。霊的な事柄はすべて、私たちが理性を通して獲得した知的な事柄と完全に調和しています。しかし、双方が比較検討された場合、重要なのは知的な事柄ではなく、霊的な事柄です。神に関する事柄は、神のみたまによってのみ知ることができるからです。

教義的な事柄を理性で解釈できるのは事実ですが、宗教を生活の中に溶け込ませるには自らの身と霊をもって何かを感じ取り、心を常に変革し、聖霊によって「新しく造られた者」(IIコリント5:17)にならなければなりません。幸いなことに、すべての教会員にはその機会が与えられています。なぜなら、教会員はバプテスマの後で「聖霊の賜」を受けるからです。これはその人が義しく忠実であることを条件に、神会の御一方である聖霊を常に伴侶とする権利が与えられるということです。

さて私たちには啓示を受ける権利があります。すべての教会員には聖霊から啓示を受ける権利があるのです。天使の訪れを受け、永遠の示現を見、そして予言者が実際に神のみ顔を拝したように神を仰ぎ見る権利があるのです。

予言者といえば、私たちは教会や世の中の行く末について告げる人と考えます。しかしすべての人は自分自身と自らに関係する事柄に対しては予言者であるべきです。モーセは次のように述べています。「主の民がみな予言者となり、主がその霊を彼らに与えられることは、願わしいことだ。」(民数11:29)

またパウロは、「預言することを熱心に求めなさい」(Iコリント14:39)と勧めてい



---

すべての教会員は、示現を目にし、天使と語り、主のみ顔を拝し、そしてあらゆる時代において忠実な人々の上に注がれてきたすべての知識と知恵を得ることができる。

---

ます。

すなわち、個人的な事柄に関しては全身全霊を尽くして予言の賜を求めべきであると勧告しているのです。

ではここで予言者ジョセフ・スミスが受けた啓示を2、3引用してみましょう。この中にはある公式が示されています。私たち一人一人はこの公式にあてはめることによって、神に関する事柄をみたまの力により知ることになるのです。主は次のように述べておられます。

「然り、見よ、われ今汝に來りて汝の心の中に留るべき聖靈によりて汝の智と情とに告げんとす。そもそも、見よ、これは啓示の『みたま』なり。」(教義と聖約8：2—3)

この啓示は、みたまがみたまに対して語るということ、すなわち聖きみたまが私たちの内にある靈に語りかけるということを示しています。その方法は人智をもってしては不可解ですが、みたまをもってすれば単純明解です。靈的な理解力によって知識や知性、真理、そして神に関する確かな知識がもたらされるのです。これはすべての人に適用されます。

「神はその聖き『みたま』により、すなわち聖靈の言い尽し難き賜によりて、世の始めより今日に至るまで嘗て表したまひしことなき知識を汝らに与えたまわん。

これこそ、わが先祖らの末の世に顕されんことを熱心なる期待もて待ち望みしものにして、彼らの栄光の完全に顕れんため保存し置かれしと天使らによりて彼らの心に示されたるものなり。」(教義と聖約121：26—27)

これは栄光にあふれた聖句で、しかも教会員一人一人に対して語られたものです。言い換えれば、皆さん方個人への直接の啓示なのです。

「主かくの如く言う。主なるわれはわれを畏るる者に恩恵と憐みとを与え、終りまで義しく且つ真実にわれに仕うる者に誉れを与うるを喜ぶ者なり。……

われは彼らにすべての奥義、すなわち昔より今に至り、またこれより永き未来にわたるわが王国のあらゆるかくれたる奥義を知らしめ、わが王国に就けるすべてに関するわが旨を知らしめん。……

そはわが『みたま』によりて彼らの覚りを開き、わが能力によりてわが意の秘密を

彼らに知らしむればなり。すなわち、誠に人の目いまだ見ず、人の耳いまだ聞かず、人の心にいまだ入らざるものをも知らしむと。」(教義と聖約76：5，7，10)

すでに述べたように、私たちは天使と語り、幻を見、示現を受け、主のみ顔を拝することができます。これについてひとつの約束があります。

「誠に、主かくの如く言う。その罪を捨ててわれに來り、わが名を呼び、わが声に従い、わが誠命を守るあらゆる人々は、わが面を見てわれ在るを知るべし。」(教義と聖約93：1)

予言者ジョセフ・スミスのことばによれば、私たち王国の長老が信仰と義において一致結束し、永遠の示現を受けるにふさわしく自らを整えるならば、いつの時代にあっても、今日にでも幕は開かれるのです。ジョセフ・スミスは次のように述べています。

「救いは啓示なしには得られない。だれでも啓示なくして教えを施すならば、それは空しいことである。だれでも予言者とならずにイエス・キリストの道を説く者となることはできない。イエスに対する証を持たずにイエス・キリストの道を教える者にはなれない。これが予言のみたまである。救いが教え説かれたのは証によってであった。今の世の人は天国と地獄について証するが、彼らはどちらも見たことがない。だれも啓示によってもたらされる証なくしてこれらのことを知ることはできないのである。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 160)

私たちに啓示を受ける権利があります。個人に与えられる啓示は、私たちの救いに

不可欠なものなのです。このことについて聖典には数々の出来事が記されています。ニーファイは次のように記録しました。

「もし汝らその心をかたくなにせず、答えを受くと信じ、固き信仰を持ち、わが誠命を勤勉に守りてわれに願わば必ずこれらのことを汝らに示さるべし。」(I ニーファイ15：11)

非常に有能な宣教師であったモーサヤの息子たちについて、モルモン経には次のように記されています。

「この兄弟たちはまことに正しい理解をもっている者たちで、神の道を知るために熱心に聖文を研究したから、すでに真理について深い知識を持つようになっていた。そればかりでなく、かれらは非常に熱心に祈りと断食をしたから『予言のみたま』と『啓示のみたま』を受け、その教えを宣べるときには神に授かった権能と威勢とによって教えた。」(アルマ17：2—3)

もうひとつ引用しましょう。これは予言者ジョセフ・スミスの言葉です。

「人は啓示のみたまの最初のささやきを自覚しただけで祝福を受ける。例えば聖い知識が心に流れ込むのを感じた時、あなたの心にはいろいろな考えが閃光のように次から次へと浮かんでくるだろう。そしてそれがその日のうちに実現することを知るのである。すなわち神のみたまによりあなたの方の心に示された事柄はその通りになる。そして神のみたまがどのようなものか知り、理解する時、あなた方は啓示の原則を自分のものとし、やがてキリスト・イエスにあって完全な者となるであろう。」(「予言者ジョセフ・スミスの教え」p. 151)

聖典は啓示の豊庫です。予言者たちはこのことについて多くのことを語りました。すなわち、私たちには霊的な経験が必要であり、神との個人的な交わりが必要であるということです。私たちは、「5分間だけ天を見つめなさい」と言った予言者ジョセフ・スミスの言葉に従う必要があるのです。

宗教とは、個人の生活の中に聖霊を取り入れることです。私たちは研究を重ね、その上で評価を行なわなければなりません。研究を通して、霊的な心の状態をもたらす基礎を築き上げるのです。そうすれば、ついには私たちの身も霊も神のみたまによって奮い立つようになります。

個人の啓示を受けるための公式についてお話ししてきましたが、この表わし方はいろいろあるかと思えます。しかし、私の場合は次のように簡単な公式にまとめることができます。

1. 聖典を研究する。
2. 戒めを守る。
3. 信仰をもって願い求める。

だれでもこの3つのことを行なえば、主と心が調和し、静かな細い声によって、永遠の原則を心に刻み込むことができるでしょう。そして進歩成長して神に近づいてゆく時に、天使と語り、示現を見、ついには神のみ顔を拝する日を迎えることができます。

宗教は霊に関する事柄です。研究については知性を十二分に用いればよいでしょうが、最後の段階では主と心をひとつにしなければなりません。

人がまず第一に得る必要のある大切な啓示は、この教会が神の教会であることを知

ることです。私たちはそれを証と呼んでいます。ひとたび証を得ると、その人はみたまと波長を合わせて啓示を受ける方法を会得します。また、そのように心を調和させることにより、個人的な事柄について直接導きを受けることができるようになるのです。そして、この賜を心ゆくまで享受して進歩する人は、ジョセフ・スミスをはじめあらゆる時代の予言者たちが受けてきた永遠に関する啓示をすべて自分のものにすることができます。

皆さんも私も、ある程度啓示を受けています。私はこの業が真実であるという啓示を受けました。したがって、私はこの業が真実であることを知っています。私がこのことを知っているのは、勉強や研究によるのではなく、聖きみたまが私の内なる霊に語りかけ、私に証を与えて下さったことによるのです。その結果、私は主より認められた僕として皆さんの前に立ち、イエス・キリストが神の御子であられること、ジョセフ・スミスが神の予言者であり、スペンサー・W・キンボールが今日の予言者であること、そして末日聖徒イエス・キリスト教会が全地の面における唯一まことの教会であることを証できるのです。

さらに、これまで述べてきたことに関連して、私は次のように証することができます。神の律法に従い、聖典を研究し、戒めを守り、信仰をもって願い求める人は、すべて神から直接啓示を受けて、この地上においては身も霊も大いなる栄光と満足を得、いと高きところの「すまい」においては究極の救いを得ることができるのです。



---

## バプテスマを 40年待ちました

ベシー・リーパー・ヨーカム

---

**私**は、18歳で結婚した時には聖書を隅から隅まで読んでいました。幾つか教会に通ったこともありましたが、ここぞと思う教会は見つかりませんでした。毎日聖書を勉強し、週1回は断食し、救い主が教えていらっしゃる原則に一生懸命従っていました。そして本当の福音を私に教えて下さる方が現われるようにいつも主に祈っていました。

1920年代のある日のことです。その当時私には4人の幼い子供がいました。家の近くの学校に宣教師が「信仰簡条」と題した

パンフレットを置いてゆき、ひとりの男の子がそれを私のところに持ってきてくれたのです。その子の話では、その晩礼拝が行なわれるということでした。夫が興味を示さないで私は行きませんでした。パンフレットはよく読み、モルモン経で言及している聖書の箇所を全部調べました。それから、ソルトレーク・シティの教会本部へ手紙を出し、モルモン経を注文しました。教会からは1冊のモルモン経と何冊ものパンフレットが送られてきました。私はモルモン経を2回読み終えて3度目に読んでい

る時、それが真実だと悟りました。まことの教会を見いだしたのです。キリストが生きておられ、本当に神の御子だということがわかりました。それを知った時、私はまず世界中の人に話したいという衝動にかられました。

そこでモルモン経を夫の姉にあげたのですが、彼女は全然関心を持ちませんでした。さらに悪いことに、姉は教会について良くないことを聞いてそれを信じ込んでいたので、夫に告げ口をしてきました。夫は私からパンフレットを全部取り上げて焼き捨て、子供をそのような宗教で教育してはならないと言いました。私は長年求め続けてきたものが目の前で取り去られようとしているのに動転し、この問題について教会本部に手紙を書きました。それに対していただいた忠告は、待ちなさいということでした。一日一日を立派に生活すれば、いつかはバプテスマへの道が開けるでしょうというのでした。夫の同意が得られなければ、妻にバプテスマを施すことはできなかったのです。

私はモルモン経はもちろんのこと、教会に対して賛否両方の読み物を手当たりしだい読みました。そして証は大きくなりました。そんな時に家が火事になってモルモン経を焼いてしまったのですが、もう一度注文することはできませんでした。でも、所帯道具を買い直した時、私が最初に購入し

た品物の中には聖書が混じっていました。それを見て私の母は、「希望を捨ててはいけないよ」と言ってくれました。

次に教会と接触したのは1940年代で、子供は6人になっていました。130キロほど離れたテキサス州ワコにいる妹の所を訪れたのですが、彼女の友達の中に末日聖徒がいるという話で、その人のついででワコにある小さな支部の日曜学校と聖餐会に出席することができました。女性の宣教師がモルモン経を下さり、私は勇気を出して、すでにそれぞれ結婚して子供がいる自分の娘たちに福音のことを話しました。

系図を知ったのはこの時のことでした。それから20年間、教会とまったく接触のない毎日でしたが、証を保ち続けてこられたのはこの系図活動のおかげです。私は、神様が先祖のために何かをする機会を与えて下さったことをいつもありがたいと思いながら、満ち足りた気持ちで系図の仕事を続けました。

また、上の3人の息子たちが1945年に第2次世界大戦から無事で戻ってこられたのもありがたいことでした。しかしその少し後、16歳の息子ロバート・リーが、兄たちと一緒に父親を手伝って小屋を移動している時に、感電して死んでしまいました。その夜、私は横になってその事件のことを考えながら、何度も自分に問いかけました。「信仰しているのに何ということでしょう。」

家族は守られると信じていたのに……。それなのに、ロバート・リーは棺の中にいる。」

すると静かなはっきりとした声が聞こえてきました。「ロバート・リーは守られています。大丈夫です。」その時私は、天父はいつも私たちの望み通りの答えを与えられるわけではないけれど、必ず私たちの祈りに答えて下さるということを知りました。私の証はまた強くなりました。

1963年になると夫が病いに倒れ、その後2年間入退院を繰り返しました。私はある日もう一度勇気を振るい起こして、モルモン経を読んでどんなものか自分で知って欲しいと夫に勧めました。すぐに、「知ってるよ、これ以上いいよ」という返事が返ってきましたが、私は引き下がりませんでした。「いいえ、あなたは人から聞いたことしか知りません。聖書が東の世界の福音であるように、モルモン経は西の大陸の福音なんです。人々が邪悪であったためにこの大陸に下された大きな災難について書かれているんです。」

とうとう夫は言いました。「そうか、ふたつの本はきっと似たようなものなんだろうね。」でも夫はモルモン経を読みませんでした。私はそれ以上何も言いませんでした。

病気が再発し、夫はまた病院に戻ることになりました。そしてある晩、昏睡状態に陥りました。午前5時頃に小康を得ると、夫は私の手を握って尋ねました。「ベッド

の足の所にすわっている女の人が見えるかい。」私が「いいえ」と答えると、また聞きました。「この人たちと話してもいいかな。」私は、夫を霊界に迎えるためにすでにこの世を去った家族や友人たちが来ているのだろうと思い、夫の死期が近づいたことを知って、いいですよと返事をしました。

すると夫は、「私は死んでいくが、この世を離れてから福音を聞く機会に恵まれればいいが……」と言いました。私は何も言えず、ただ心で祈るだけでした。そして夫がついに回復された福音を聞く気持ちになってくれたことを感謝しました。

夫の死後1カ月して、私はバプテスマを受けました。そして1年後にソルトレーク・シティへ行き、夫との結び固めを受け、息子のロバート・リーを私たち夫婦に結び固めました。現在生きている子供たちのほとんどは、私が回復された福音の話をする前にほかの教会に加入していました。

私は福音の証を得てから40年ほど経った1965年に69歳でバプテスマを受けましたが、その間私の証は少しも揺らぎませんでした。信仰を持ち、祈りを捧げ、福音を真面目に勉強したおかげで、証を保ち続けることができました。私は真の福音を見つけたのです。今も、イエス・キリストが世の救い主で、この教会の頭でいらっしやることを心から証します。

コ ミュニティーカレッジの教師をしているデビッドは、奥さんがなくなった時、奥さんの枕元にいました。闘病生活の短い、思いがけない死でした。ショックや悲しみの中で、デビッドにとって一番気がかりだったのは7人の小さい子供たちのことでした。病院は家から少し離れていたため、彼は以前監督だった人に電話をし、家族に知らせてくれるよう頼みました。その友人は家族に今何が起きて、家族の生活にとって

それがどういう意味を持つのかを、冷静にありのまま、福音の教えに基づいて子供たちに話して聞かせました。

それから数日間、子供たちは父親や身近にいる人に自分の不安や心配を打ち明けました。しかし彼らは、信仰を持った周りの人たちから落ち着きや平静さを感じ取って、母親の霊がまだ生きていていつかは肉体と結合することを知り、母の死というものを受け入れるようになりました。母親とまた

## 子供に「死」を 語り聞かせること

ジョン・M・テイラー





会えること、自分たちのことを思う母親の愛情は変わらないことも知りました。

本当にあったこの話と似たような話を、肉親を失った多くの家族から聞きます。めったにはないこうした境遇に直面する時、福音が与えてくれる希望は、どんなにありがたいことでしょう。回復された福音の教えは、こういう時に計り知れない祝福となるのです。

私は合衆国中西部の町で伝道していた時に13人の子供がいる家族と出会いました。子供さんたちは成人してみんな家を出ていましたが、愛が通い合う仲の良い一家でした。亡くなった人を除いた12人の子供の内10人が、母親の家から2丁と離れない所に住んでいました。その母親が亡くなった時、悲しみに沈む子供さんたちが私たちを呼んで救いの計画について話してくれるように頼みました。私たちが話を始めると、悲しみが真剣なまなざしに変わり、やがて主に対する感謝に変わりました。

啓示された真理は力と希望を与えてくれます。しかしそれでも、愛する肉親を失うことは克服し難い辛い経験です。私の妻が学齢前のふたりの子供を残して亡くなった時、私は子供に妻がいないことを納得させるのに指針を得たいと思いました。その時わかったことを幾つか挙げてみたいと思います。

1. 前世、霊界、復活の概念をわかりやすく教えること。神殿の結び固めのことを話したら、子供たちは家族がやがて再会するということを理解しました。また教会歴史や家族の記録、個人の記録などから信仰

を強めてくれる良い話をしましたが、それによって母親とまた一緒になれるのだという信仰を子供ながらに強くしたようです。

2. 上記のような話し合いがあると、残された人たちに対する子供の見方を歪めたり、不要な心配を招いたりするような説明をしないで済みます。亡くなった妹は「あまり良い子でこの世に置いておくのがもったいないから次の世に行ったのだよ」と聞かされたら、生きている人たちは良い人ではないと思ひ込むかもしれません。死んだおばあさんを「ただ眠っているだけだよ」と説明すれば、子供は床に入るのを怖がるかもしれません。

3. 大人の冷静さが子供に影響を与えることがわかりました。親が死というものを避けられないものであるがそれで終わりではないと受け止めれば、子供もそう受け止めます。親が悲しみのあまりすぐには子供に話ができないなら、平静さを取り戻すまで家族のだれかが友人が話してあげるとよいでしょう。

しかし、悲しい気持ちを隠す必要はありません。ある母親が夫の死に打ちのめされ、自分では話せないで、子供たちの叔母にあたる人に話をしてもらうように頼みました。予感に顔をこわばらせたふたりの娘さんは、身じろぎもせず知らせを聞きました。平然とした風で涙も見せない叔母に、彼女たちはあとずさりする気配でしたが、叔母がこらえきれずに泣き始めると、少女たちは叔母の肩を抱いて一緒に泣いたのでした。悲しみは軽くなりました。

親が素直に自分の感情を表わせば、子供

たちには悲しむのが自然で、しかも望ましいことがわかるでしょう。

4. 子供たちの不安を取り除くのに一番良かったのは、じっくり話を聞くことだったと思います。泣きたかったら泣かせてあげ、自分を責める気持ちがあったらそれを打ち明けさせて下さい。片親をなくした子は、残る片親がまだ自分を愛していて、自分をひとりぼっちにはしないことをはっきり知りたいかも知れません。簡単に、率直にそれを言ってあげるだけで子供は満足します。

5. 話すことも大事ですが、言葉ではないことの方がもっと重要だと思いました。真心のこもった声、温かい態度、しっかりと抱きしめてあげることなど、言葉には表わせない深い思いをそうした行動によって伝えることができます。

6. 子供たちの気持ちを紛らすために、水泳とかキャンプとかスポーツとか、楽しい活動をさせてあげる必要があります。友人や身内の人との触れ合いはとりわけありがたいものです。ベットも気持ちを明るくしてくれますし、感情のはげ口としても安全です。

7. 亡くなった人の思い出を大切にすることが大事です。親の死を子供にしっかり納得して欲しいと願う一方で、良い思い出は忘れないで欲しいと思います。家族の写真を見たり、質問したりしながら、故人に対する感謝や理解が深まっていくのだと思います。

8. もし子供の不安や罪の意識や虚脱状態が続くようであれば、専門家に相談した方がよいでしょう。ただし、福音の教えが

わかっていて、それに則って話をしてくれる人であることが条件です。

人の死に遭遇した時に以上のことは役立つと思いますが、身近な人の死に直面する以前から子供にその用意をさせておく方法もあります。家庭の夕べで死についてみんなで話し合ったり、友人や遠い親類に不幸があった時に取り上げて話し合うこともできます。大きな子供であれば、葬儀に出て死に対する認識を持つこともあるでしょう。

動物の死からも教えられます。私の息子のジョナサンは、以前ヘビの死骸を持ち帰ったことがあります。彼はヘビを生き返らせようとして、ちぎれた尾に包帯を巻いていました。ヘビが死んでしまったらいくら包帯をしても生き返りはしないということを経験させるのにひと苦労でした。

肉親の死を子供がいったん納得すると、その信仰や回復力は驚くほどです。私の妻が他界した時、私たちの陽気な娘セレンダが「我が家の女主人」になりました。セールスマンなどが来てお母さんを出して下さいと言うと、「母はいないんです。天国にいます」と答えたりしています。事実をずばり口にする率直さに、周りはもう舌を巻いています。

肉親をなくしても順応が早い子供を見るのは慰めですが、自分は愛されていると感じさせ、感情面で支えてやることはぜひとも必要です。人生いつでもそうですが、イエス・キリストの福音は生活の基盤となり、復活や永遠の生命への希望を与えてくれるのです。

# みんなで話そう

家族で話し合う時の提案



「月曜の夜の家庭の夕べは、我が家ではかなり順調に運んでいます。テキストはレッスンの方向を知る程度に使っていますが、家庭の夕べや家族で勉強する時間に上手に話し合いを始めるのがどうも苦手です。

家族でそろって楽しむのは簡単ですが、さて福音の話し合いをしようという段になると、みんなの口が重くなるのです。」

あなたの家庭ではいかがですか。思いあたりませんか。

集会統合スケジュールのおかげで日曜日

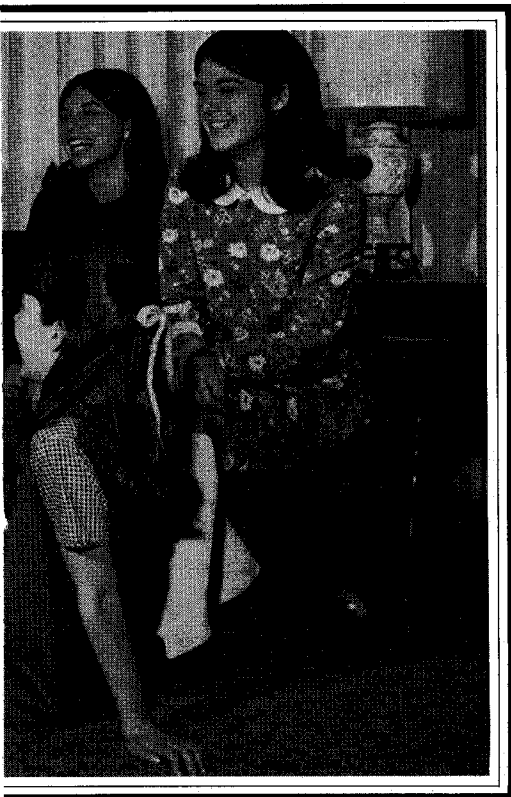
に家族で過ごす時間が以前より多くなりましたが、教会ではそれらの余暇を利用して、月曜の夜の家庭の夕べ以外にも家族で福音を勉強するように勧めています。しかし家庭の夕べのテキストにそうしたレッスンが余分に収められているわけではありませんから、どこに教材を求めたらよいかという問題が出てきます。

当然のことながら、聖典が一番の資料です。それに教会の雑誌も話し合いの題材が豊富です。「聖徒の道」のどの話をとっても話し合いの材料になります。大管長会メッセージ、大会報告や説教、結婚や家族、個人の必要、最近の教会のカリキュラムやプログラム、福音を日常生活に応用する方法、あるいは現代の聖徒たちの霊的な経験など、様々な記事が利用できます。

記事を個々に、あるいは家族みんなで読んだ後、それについて話し合い、質問して下さい。年長の子供には、はいやいいえで答えられる単純な質問を避け、思考や分析を必要とする質問をして下さい。特別なチャレンジや話題について家族が率直に意見を交わす場になると思います。家族が一緒に、知識や意見を交換し、質問を出し、考えをまとめ、提案し、時には共通の結論に達することもあるでしょう。

### 話し合いの進行

しかし、話し合いを始めるにはどうすればよいでしょうか。また、話し合いを進めてゆく時に、気をつけなければならないことはどんなことでしょうか。次に挙げる9項目（メルケゼデク神権M I A作成、1974



年地区集会用資料「討論会の進め方：リーダーへの実用的な提案」より抜粋）は、家族の話し合いにも役立つと思います。

1. 話しやすい雰囲気を作ること。非難される心配がなく、だれもが自由に自分の考えを述べ、みんなで話し合うことができるような雰囲気が必要です。みんなが同じように考えなくてよいこと、一人一人の考え方が大切なことを家族に理解させて下さい。開会の讃美歌と祈りや、席の上手な配置方法（円に並べるとよい）も、雰囲気作りに役立ちます。手を挙げさせるとか順番に発言させることにこだわらず、ざっくばらんな雰囲気にして下さい。

2. 独創的な方法で始めること。「聖徒の道」から聖句や記事や説教を取り上げて話し合う時には、最初にみんなで声を出して読んだり、めいめいで読んだりするとよいでしょう。また共通点のあるものや物語、興味を引く質問、体験談、ゲーム、クイズ、あるいは教会付属図書館の教材（フィルムストリップ、テープ、地図、絵など）を使って話し合いを始めるのもよいでしょう。その際、興味を引く導入方法が話し合いの主題にすんなり結び付くように、また家族が話し合いの目的をはっきり理解できるように気をつけて下さい。

3. 話し合おうとする記事を読んだら、それを自分の家族に当てはめることができるように具体的な話に移ること。たとえば、記事の主人公について話し合いたいならば、次のように質問するとよいでしょう。主人公は何をしたでしょうか、この経験から何を学んだでしょうか、態度はどのように変わりましたか、自分が主人公の立場であった

らどうしたでしょうか、同じような行動を取りましたか、など。

また、記事の背景について話し合いたいならば、次のように尋ねます。こういう出来事が起きたのはなぜでしょうか、ほかの解決法があったのでしょうか、私たちの家庭がこのようになるには、あるいはならないようにするには、どうしたらよいでしょうか、など。

また、記事に対する家族の反応について話し合いたい時には、次のような質問をします。この記事を読んでどう感じましたか、それによって自分の生活や家族の生活がどう変わるとおもいますか、この記事から何を学ぶことができるのでしょうか、など。

記事の中の考え方について話し合おうとする時には、次のように尋ねるとよいでしょう。信仰に対する筆者の考え方に賛成しますか、あなただったら信仰をどのように定義しますか、そう考えるのは、何か特別な経験をしたからですか、など。

進行係のあなたが、質問を全部自分でする必要はありません。家族に質問を出させて下さい。採り上げた記事や話し合いについてどう感じているか、意見を述べるように勧めて下さい。

4. 話題をひとつに絞ること。話し合いが主題から外れないように、穏やかでありながらきっぱりした態度を取るのがあなたの責任です。しかし、家族があなたの意図していることをすべて言い尽くさなくても、あるいは話し合いが考えていたのと違った方向に進んだとしても、心配しないで下さい。それぞれの方法で主題に迫って、いっそうにかまわないのです。

5. どの意見も注意して聴くこと。意見の背後にある意味も理解するように努め、みんなにもそのように勧めて下さい。そうすれば、家族、特に小さい子供たちが自分の意見も大切であることを知り、進んで考えを述べたいと思うでしょう。

6. みんなを参加させること。1, 2名に話を独占させないで下さい。おしゃべりな人の意見や性格に圧倒されておじけづいてしまうような子供には特に気を配り、その子も自分の考えを話せるように励まして下さい。全員に何かしら話す機会を与えて下さい。良い意見はほめましょう。

7. あなたの役割が目立ち過ぎないようにすること。すべての質問に答えよとか、どの意見にもひと言つけ加えなければならぬなどと考えるはいけません。出された質問は家族に問い返し、家族の考えや意見、解決方法などを聞いて下さい。概して、司会者がみんなの中のひとりとして溶け込めば溶け込むほど、ほかの人たちから活発に意見が出るようです。

8. 話し合ったことを最後にまとめるか、だれかにまとめさせること。出された意見をすべて繰り返すのではなく、内容を分析するようにして下さい。まとめが各自の考えを正して反映しているか、家族に聞いて下さい。

9. 話し合いを評価すること。全員が自由に意見を述べたかどうか、次の時にはどんな点を改善したらよいか、自分で考えるなり、家族に聞くなりして下さい。

## 話し合いへの参加

参加する人のために幾つか提案を挙げてみましょう。

- (1) 自分の考えを述べ質問に答えるという責任を受け入れる。
- (2) 質問がはっきりしない場合や他の人もよく理解していないような場合は、その質問の意味を明確にしてもらう。
- (3) 意見から次の意見までの沈黙の時間を、いつでも埋めなければ悪いなどとは考えない。
- (4) 次に話すことばかり考えていないで、人の話をよく聞く。
- (5) 司会者や特定の人に向かって話すのではなく、家族全員に向けて意見を発表する。
- (6) 長い発言をして時間をひとり占めないこと。
- (7) たとえ自分と違う意見であっても、人の考えは尊重する。口論を避け、平静な態度を保つ。異議を唱えるべきだと感じた時も、相手の気持ちを考え、穏やかで友好的な態度で話す。
- (8) 話し合いが終わった時に適切な結論がまとまるように協力する。

最も大切なことは、家族全員が話し合いの目的を忘れないことです。その目的とは家族が親しさを増し、福音について学び、信仰と決意を深め、そしていつでも心を開いて話し合える家族関係を築くことなのです。

# エセル

スーザン・H・エイルワース

学生時代のことで、私は、ユタ州アメリカン・フォークにある知恵遅れの人たちのための州立訓練学校で、ミュージアルプログラムにしばらくの間携わっていました。私はすぐに彼らを受け入れ、愛するようになりました。精神的、肉体的には弱くても、霊的にはきわめて敏感で、鋭いものを持った彼らでした。

でも、エセルは別でした。彼女は大腦をひどく冒されていたのです。彼女の世話をすることは、私にとって本当に難しいことでした。同情、時には嫌悪が先に立ってしまうのです。エセルの手足は金属の棒に結びつけられています。そうしないと、自分で自分の体を傷つけてしまうからです。彼女にも思考力があると聞いていましたが、それも、係の人たちが40年近くもかけてやっと見いだしたことでした。長い間、あまりにも不自由な体の中にうずもれてしまっていたのです。担当者たちはやっとのことで彼女に話すことを教えました。それでも私には彼女が何と言っているのかわかりませんでした。こ

んななじめな状態をさらしながら、主が彼女をなおも生きながらえさせるのはなぜだろう、と私は思いました。

ある日、私は訓練所で開かれた断食証会に出席しました。証会がまさに終わろうとする時のことでした。エセルが証をするというのです。彼女の言うことはだれも聞きとれないのに、どうして話させるのだろう、と私は思いました。ところが、エセルははっきりとした口調で話したのです。私にも彼女の言うことがよくわかりました。エセルは「私は生きていてうれしい」と言ったのです。

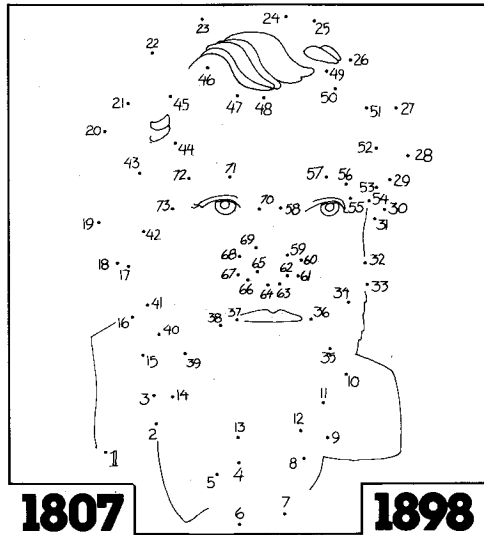
私は息をのんで彼女の言葉に耳を傾けました。「天のお父様を愛しています。」その声に、私は涙をおさえることができませんでした。

エセルの証が終わると、みんなは大好きな歌を歌いました。「神の子です、私やあなた……」と。私はこの歌を聞くたびに、エセルのことを、そして彼女が私に教えてくれた大切なことを思い出すのです。



ちい とも  
**小さなお友だちへ**

ウイルフオード・



ウッドラフ

**あ** やういところで命をとりとめた数  
 数の出来事、苦勞や困難、ぐんぐ  
 んと人々を引つばる力。こういったもの  
 は、いずれも第4代大管長ウイルフ  
 オード・ウッドラフの生がいだいかんちやうを代表す  
 るものです。ウッドラフ大管長は、3  
 歳の時にぐらぐらとにえ立った大なべ  
 の中に落ちてしまいました。また、そ  
 れから2、3年後には、父親の牛の世  
 話をしている時にとっ進してきた雄牛  
 の角でつかれて、あやうく命を落とし  
 そうになりました。さらに若い頃には、  
 たおれた木の下じきになりそうになっ  
 たこともあります。しかし、このよう  
 なできごとを何度も経験しながらも、  
 ウッドラフ大管長は、神の愛と恵みに

よって危険から守られてきました。

アーカンソーとテネシーで伝道して  
 いる時に、ウッドラフ長老とその同僚  
 は「食べ物を何も持たずに」夜明けか  
 ら夜の10時まで、実に95キロの道のり  
 を歩き続けました。また、英国で伝道  
 していたウッドラフ長老は、信仰しんこうを持  
 って一生けんめいに働いたので、大勢  
 の人々にバプテスマをほどこすことが  
 できました。長老の力強い導きと働き  
 によって、数百人に上る人々が教会に  
 導かれたのです。

1889年、ウイルフオード・ウッドラ  
 フは82歳で大管長となり、91歳で亡く  
 なるまで主に仕えたのでした。

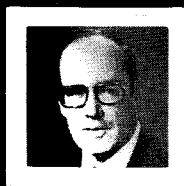
あ る暑い夏の日のこと、私たち一家は、午後のひとときを山で過ごすことに決めました。前から家族全員で近くの洞くつに行くという計画があったからです。早速ハイキングの用意をして、お昼のお弁当を持ってでかけました。

私たちはみな、胸をわくわくさせて出発しました。しばらくすると山のひんやりした空気が体中にしみてきました。洞くつではひとりの案内人にむかえられ、彼が案内役をつとめてくれました。説明によると、穴はもともと3つあって、それぞれ別別に発見され、後に人の作った通路によってひとつに合わされたのでした。穴の中にはおもしろいもようの

岩がたくさんあって、中には、昔のままの形で残っているものもありました。案内人が通路のわきにある細いすきまを指して言いました。「この下にはもうふたつ洞くつがあるのですが、まだ人が通れるようにはなっていないのです。いつか中に入れるようになるとは思いますが、今のところはその方法が見つかっていません。」

私たちは、するどくとがった岩に注意して頭を下げながら、その初めて会った案内人の後について行きました。また、バランスを取るために、洞くつの岩に沿ってとりつけてある鉄の手すりにつかまって歩かなければなりませんでした。

七十人第一定員会  
F・ハートン・ハワード



## てつ ぼう 鉄の棒



私は、写真をとるためにみんなから少し離れて後ろを歩いていきました。その時です。とつぜん洞くつの電気が消えてしまったのです。それがわざとやったものが停電であったのかはわかりません。私のずっと前にいた案内人の声がかだまして聞こえてきました。「みなさん、大丈夫です。落ち着いて下さい。電気はすぐにつきます。鉄の手すりにつかまって、そのままお待ち下さい。」彼の懐中電燈ちゆうでんとうの光が遠くでチカチカ光っています。

私は、とがった天井の岩や通路がこわれて落ちてきはしまいかという不安がこみ上げてきました。こんな所で人がいなくなったとしても、決して見つかるはずがないのです。私は、気を落ち着けようとして、かたむいているかべにもたれかかりまし

た。そして、手さぐりで鉄の手すりをさがしました。そうです。たとえ電気がつかなくても、私の前には案内人がいるし、それに私は鉄の手すりにつかまっているのです。出られないはずがありません。

一しゅん、まわりの人々からざわめきが起きました。しかし洞くつに慣れている案内人の言葉に従って行動する限り、私たちの身は安全であるということを一一人一人がさどっているように見えました。何もおそれることはありません。案内人の声ははっきりと聞こえてきます。私の手は、鉄の手すりをしっかりとにぎっているのです。

数分後、電気がつきました。私たちはもとのように、美しい洞くつの探険を続けることができました。しかし、だれかが通路からそれたり鉄の手すりから手を離したりしたら、どうなっていたでしょうか。また、自分勝手に洞くつから出ようとしたら、どうなっていたでしょうか。案内人や鉄の手すりがなかったら、私たちは洞くつから出ることができたでしょうか。

私たちの人生においても、時とし

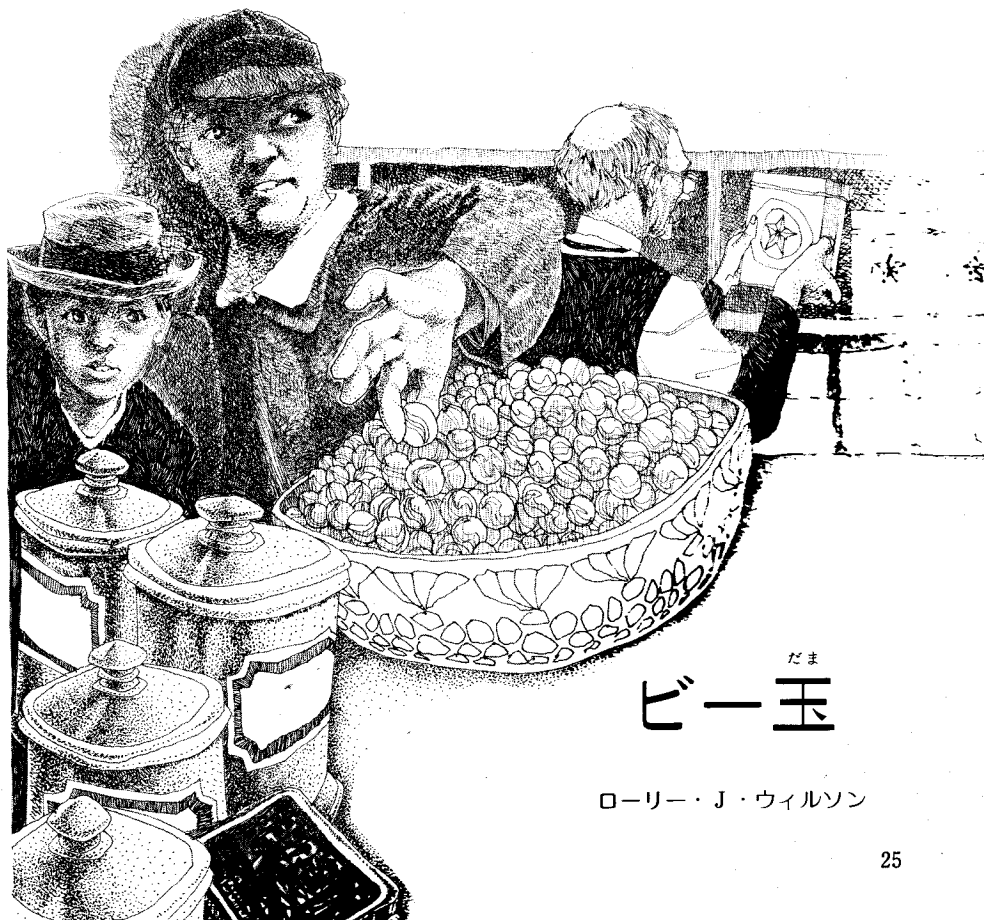
て光を失ってしまうことがあります。友達から間違ったことをするようにしいられた時、愛する人を失った時、悲しいこと、さみしいこと、がっかりするようなことが起きた時。しかし、私たちは決してとまどったり暗やみをおそれたりすることはありません。救い主もまた、暗やみを通りぬけられたのです。救い主は、私たちの気持ちを御存じであるばかりでなく、どのようにのがれたらよいかも知っておられるのです。そして、私たちが正しい道を歩めるように、福音という鉄の棒を与えて下さいました。救い主が示しておられる道は、洞くつから人々を導き出す以上に大きなことをしてくれます。つまり、天父のもとにもどれるよう導いてくれるのです。

このほかにも、家族で戸外の活動を楽しんだことが何度かあります。そして、その一つ一つが愛や理解、協力という事柄を教えてくれました。しかし、何年か前のその夏の日、暗い洞くつの中でしめった鉄の手すりをしっかりとにぎりしめながら、私は信仰という決して忘れられないことを学んだのでした。

「**ジ** ヨニーにきつと勝ってみせるよ、おかあさん。」ぼくはそういいながら、そのあさ、学校へといそぎました。とうとうビー玉コンテストの日がやって来たのです。クラスの子もたちは、なんしゅうかんもまえからくびなが長くしてこの日を待っていました。その日ぼくは時間がとてもゆっくりすぎているように思えてなりませんでした。やっとじゅぎょうが終わりました。クラス全いんが教室の外に集まりました。ぼくはかてると信じていました。

ぼくは、その時、はじめてジョニーの新しいビー玉を見ました。「いいだろう、ゲリー。」ジョニーは何どもそういました。

ぼくはジョニーのような新しいビー玉を持っていないのでくやくしてしかたがありませんでした。でも、そのことをジョニーに気づかれないようにしました。しあいが始まりました。ぼくはいっしょうけんめいがんばりました。でも、ジョニーに負けてしまい、ビー玉をぜんぶとられてしまいました。



だま  
ビー玉

ローリー・J・ウィルソン

学校からの帰りの道、ぼくはすごく自分に腹を立てていました。そして、弟のサミーをつきとばすようにして家にかけてこみました。ぼくははずかしくてその上むしゃくしゃしていました。友だちのいるところでジョニーに負けてしまったのです。おまけに家に帰るのがおそくなり、ぼくのたすけがひつようだったおかあさんはイライラしていました。おかあさんは今すぐに毛糸がひつようだったのです。サミーはまだひとりでは買物に行けません。おかあさんはいそいで毛糸を買ってくるようにいってぼくにお金をわたしました。サミーはいっしょについてこようと思いました。ぼくはいそいでいたので、ひとりでいこうと思いましたが、サミーはどうしてもぼくのいうことをききません。店までほとんど走りつづけました。サミーは後ろからいっしょうけんめいついてきました。ぼくが毛糸を買おうとした時、サミーは店の中に入ってきました。ぼくは、サミーのかなしそうな目をわざと見ないようにしました。



レジのところへいくと、おなじワード部のピリングズさんがはたらいていました。その時ぼくは、ジョニーが持っていたのとおなじようなビー玉がカウンターの上にあるのに気づきました。取られたビー玉のことを考えながらはこの中のビー玉を見つめていると、手があせでしめってきました。こうげきにつかえるビー玉が1こあればいい……こんなにたくさんあるのだから、ピリングズさんは1こぐらいなくなっても気がつかないだろう。ぼくはそう思いました。

ぼくはまわりを見て、だれもいないことをたしかめました。ピリングズさんは後ろをむいて、ほかのおきゃくさんと話をしていました。ぼくは気づかれないようにそっとむらさきのビー玉をポケットに入れました。ビー玉はひんやりとしてなめらかでした。ところが、サミーが見ていたのです。サミーは口をあけたまま、何かいいたそうにしてぼくのほうをじっと見ていました。それから目をそらしてしまいました。

ピリングズさんはレジのところにもどってきました。「ほかに何かひつようなものは、ゲリー。」少しとまどいながら「いいえ、……これだけです」とこたえました。

ピリングズさんががっかりしたような顔をしたように思えたので、ぼくは心配になりました。それからピリング

ズさんは聞きとれないくらい小さな声  
でいきました。「ビー玉は？ わすれた  
のかな？」

すべすべしてひんやりとしていたビ  
ー玉が、ポケットの中で火の玉にかわ  
ったように思えました。ビリングズさ  
んは後ろを向いていたのに……なぜほ  
くがビー玉をぬすんだのがわかったの  
だろう。ぼくはどうしようもなくあわて  
てしまいました。どうすればよいのか  
わからずに、しばらくのあいだそこに  
ばかりに立っていました。ぼくは  
ゆっくりとビー玉を取り出してレジの  
ところにおきました。サミーのかん高  
い声が聞こえてきました。

「そのビーだま、おにいちゃんのだ  
よ。いつもおにいちゃんがたいせつに  
しているビ……。」

「サミー。」ぼくはそう言って弟をに  
らみつけました。「よけいややっこしく  
なったじゃないか。」

ビリングズさんはぼくが口を開くの  
を待っていました。「ぼく……わすれて  
いました。……」ぼくはどもりながら  
いきました。

ビリングズさんはビー玉のねだんが  
かいてあるところをさしました。

「ぼく、ビー玉を買うお金持ってい  
ないので……。」こういって、ぼくはビ  
ー玉をはこの中にかえました。

毛糸のお金をはらって店を出るとき、  
ぼくはドアのところどとまってビリン

グズさんに聞きました。「おとうさんと  
おかあさんにぼくがビー玉をぬすんだ  
ことをいいますか。」ビリングズさんは  
じっとぼくを見つめたあとで、やっと  
「いわないよ」とこたえました。

あんしんしたようなそうでないよう  
な気持ちになりました。「ありがとう。  
ビリングズさん。ぼくもうぜったいに  
しません。」

「ゲリー、わたしはきみのおとうさ  
ん、おかあさんにはいわないよ。……  
きみに自分でいってもらいたいから……」  
信じられませんでした。「ええ？ ぼ  
くが話すんですか？」

「ゲリー、きみのおとうさんは6年  
かん、かんとかくをしているね。」

ぼくはうなずきました。「この町のみ  
んなは、きみのおとうさんを一ばんそ  
んけいしているよ。……なぜだかわか  
るかい。」ぼくはこたえませんでした。

「みんなおとうさんのことをしんらい  
しているからだよ、ゲリー。」

サミーは帰ろうとしてぼくの手をひ  
っぱりました。「わたしかいわなくても、  
自分でいえるね、ゲリー。」

「もちろん、きみがだまっていれば、  
おとうさんたちは何があったか知るこ  
とはないだろう。」ビリングズさんの目  
はまっすぐぼくを見していました。「でも、  
きみならきつといえるよ。」

ぼくは、うちに帰っておとうさんや  
おかあさんに話すことがこわくなりま



した。何てい**なん**えばいいの**ん**だろう。

「よかったね。おに**い**ちゃん。おと**う**さんに**わ**かったら**ほん**とうにお**こ**られるよ。でも**わ**かり**っ**こないよ。ぼく**ぜ**った**い**い**わ**ないもの。」

「うる**さ**い、サミー。」こ**わ**い**か**顔を**し**したのでサミーはだ**ま**って**し**ました。**お**とう**と**弟の**い**う**と**お**り**です。お**と**う**さ**んに**し**か**ら**れる**だ**ろう**な**あ。……お**と**う**さ**んは**い**つ**も**みんな**の**も**は**ん**に**なる**よ**うに**い**って**い**た**も**の……ぼく**た**ち**の**こ**と**を**し**ん**じ**て**い**る**ん**だ。……お**と**う**さ**ん**の**が**っ**かり**し**た**か**お**顔**なん**か**み**た**く**な**い。

ぼくは**ピ**リングズ**さ**ん**が**い**っ**た**こ**とを**ず**っと**考**えて**い**ま**し**た。どう**す**れば**よ**い**か**わ**か**り**ま**せ**ん**。家**の**中**に**入**ろ**う**と**した**時**、サミーはぼく**の**う**で**を**つ**か**ん**で「お**と**う**さ**ん**に**い**う**の？」**と**い**っ**てぼく**の**目**を**じ**っ**と**見**ま**し**た。ぼくはこ**た**え**ま**せ**ん**で**し**た。

お**と**う**さ**んは**し**ん**ぶ**ん**を**読**ん**で**い**ま**し**た。あ**い**さ**つ**を**す**ると、ち**よ**っ**と**、目**を**あ**げ**た**だ**けで、ま**た**し**ん**ぶ**ん**を**読**み**は**じ**め**ま**し**た。ぼくはま**よ**い**ま**し**た**。な**ぜ**い**わ**な**く**て**は**い**け**な**い**の**だ**ら**う**。も**う**ぜ**っ**た**い**に**し**な**い**の**に**……。

ぼくはサミー**を**見**た**と**た**んに、じ**ぶ**ん**が**ま**ち**が**っ**て**い**る**こ**とに**気**づ**き**ま**し**た。サミーは**へ**や**の**ま**ん**中**に**立**っ**て、こ**れ**か**ら**ど**う**な**る**の**だ**ら**う**と**ク**リ**ス**マ**ス**の**プ**レ**ゼ**ン**ト**を**開**く**と**き**の**よ**う**な**目**でぼく**を**見**つ**め**て**い**ま**し**た**。こ**の**時

**お**とう**と**弟**の**サミー**が**ど**ん**な**に**ぼく**の**こ**と**を**う**や**ま**っ**て**い**る**か**が**わ**か**り**ま**し**た**。サミーは、ぼく**の**た**め**に**う**そ**ま**で**つ**い**て**く**れ**た**の**に、ぼく**は**サミー**に**い**じ**わ**る**を**し**て**し**ま**っ**た**の**です。な**ん**て**わ**る**い**て**ほ**ん**を**し**め**し**て**い**る**の**だ**ら**う**。ぼくは**か**な**し**く**な**り**ま**し**た**。

ぼく**が**す**べ**て**を**う**ち**あ**け**る**あ**い**だ**、お**と**う**さ**ん**は**ぼく**を**じ**っ**と**見**て**い**ま**し**た。でも、ぼく**は**お**と**う**さ**ん**を**見**て**い**る**こ**と**が**で**き**ま**せ**ん**で**し**た。お**と**う**さ**ん**は**ぼく**が**す**べ**て**を**話**し**終**わ**った**後**も、**ず**っ**と**だ**ま**っ**て**い**ま**し**た**。ぼく**は**と**て**も**し**ん**ば**い**で**し**た**。

「お**と**う**さ**ん**を**見**な**さい。」お**と**う**さ**ん**は**や**さ**しい**声**で**そ**う**い**い**ま**し**た**。ぼく**は**び**っ**くり**し**ま**し**た。お**と**う**さ**ん**は**に**こ**に**こ**し**て**い**ま**し**た**。でも**目**に**は**な**み**だ**が**う**か**ん**で**い**た**よ**う**で**し**た。「ケ**リ**ー。よ**く**話**し**て**く**れ**た**ね。ほん**と**う**の**こ**と**を**い**う**ゆ**う**き**が**あ**っ**た**の**だ**ね。も**ち**ろ**ん**、お**ま**え**の**や**っ**た**こ**と**は**い**い**こ**と**だ**と**は**い**え**な**い**よ**。それ**な**り**の**つ**ぐ**な**い**を**し**な**い**と**ね**。し**ば**ら**く**ピ**リ**ン**グ**ズ**さ**ん**の**お**店**を**て**つ**だ**っ**て**み**る**の**も**い**い**か**も**し**れ**な**い**ね。」

お**と**う**さ**ん**に**ほん**と**う**の**こ**と**を**話**し**て**あ**ん**し**ん**し**ま**し**た**。し**ば**ら**く**は**ビ**ー**玉**あ**そ**び**は**で**き**ま**せ**ん。でも**ち**っ**と**も**気**にな**り**ま**せ**ん。こ**ん**ど**ジョ**ニ**ー**と**ビ**ー**玉**を**し**たら、ぼく**の**古**い**の**を**使**っ**てと**ら**れた**ビ**ー**玉**を**と**り**か**え**す**つ**も**り**で**す。

# 1,500キロの荒野をはだして

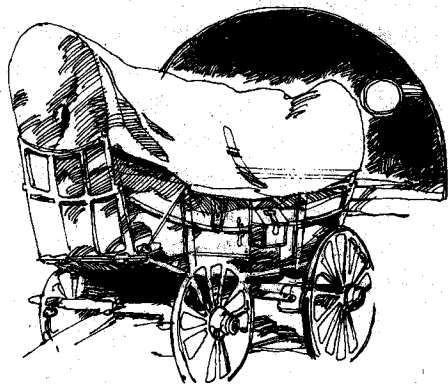
チャーチニュース記者  
ハル・ナイト

**毎**年世界中のモルモン教徒は、1847年から1869年の大陸横断鉄道敷設までの時期に荒野を越えてユタを目指した開拓者たちを偲び、そして讃える。およそ7万人の男女、子供が、この時期に荒野へ挑んだのであった。

彼らは各地、各国から幌馬車で、あるいは徒歩でその途についた。迫害に追われ、信仰を同じくする人々と霊の王国のみならず現実の神の王国の中でより良い生活をしたいという願いと集合のみたまに促されて。

辛苦の旅に赴いた一人一人に、語るべき話はある。その経験は共通だが、しかしその細部と那人自身とさらに旅に対する対応とでそれぞれの経験は違ってくる。

後に教会の有名な歴史家となるB・H・ロバーツも、荒涼たる平原を徒歩で渡ったひとりであった。わずか16歳の姉ポリーと長旅をした彼は、当時10歳であった。敷設





された鉄道の終わりがアイオワ州カウンスル  
ブラフスで開拓者たちの出立地となってい  
たが、そこに近いネブラスカ州を發った375  
名の移民団にふたりは加わった。出発日  
は1866年7月13日であった。4年も顔を見  
ない母親はソルトレーク盆地で、いつも  
知れぬふたりの到着を待っていた。

目的地までは2カ月の旅であった。幌馬  
車には生活必需品を積むため、子供を含め  
て全員が1,500キロの全旅程を歩き通さね  
ばならなかった。途中、移民団のひとりが  
病いで死亡した。インディアンとのめごと  
もあった。しかしその長旅は、労苦と疲  
労と寒さと、しまいには飢えの日常であ  
った。

ところがロバーツは、荒野横断の旅を艱  
難辛苦とさほど思わず、聖徒たちを試し、  
清める格好の機会であると常に見ていた。  
その旅は単なる野外での生存に終わらず、  
特別な意味を持っていた。

彼は当時の自分を、仰向いた鼻で、前歯  
の間はすいており、ねずみ色の髪を短く刈  
ってポロをまとった太めの少年と評してい  
る。好奇心旺盛でいたずら好きな少年であ  
った。途中で規則違反により問題を起す  
こともままあった。

彼は自分の靴を旅の早々になくしてしま

ったため、1,500キロ近い距離をはだして  
歩く羽目になった。擦れてひび割れができ  
て血のにじんだ足は何年も治らず、過去の  
体験をまざまざと思い出させるものとな  
った。それと、寒さの厳しい夜とが。

インディアンは恐ろしいとされていた。  
子供たちは幌馬車の近くにいるように口を  
酸っぱく注意され、大人は子供が失踪して  
拷問されたり身代金を要求されたりする話  
を何度も話して聞かせた。しかし、ハリ  
ーと呼ばれていた若いB・H・ロバーツには、  
そんな話もうっとうに効き目がなかった。

彼は同じ年頃の少年と連れ立って、ブラ  
ット川のほとりの茂みですぐりの実を取  
っていたが、ふと気がつくとき最後の幌馬車  
が見えなくなっていた。

ふたりは急いで歩き出したが、帽子にい  
っぱいのすぐりをひとつも落とすまいとし  
て、走りはしなかった。丘のてっぺんで馬  
にまたがった3人のインディアンに出食  
した時には、仰天した。「毛が逆立つほどの  
怖ろしさ」を感じながら、それでも少年た  
ちは険しい顔つきで黙っている馬上のイン  
ディアンをじっとにらみながら、足が勝手  
に歩くといった感じでそのまま歩き続けた。

ハリー少年がひとりのインディアンのそ  
ばに近づいた時、そのインディアンが「耳  
をつんざくような雄叫びを上げた。」少年た  
ちは帽子もすぐりも放り投げ、命大事とば  
かりに駆け出した。インディアンは馬の背  
につかンばかりに体を折り曲げ、きゃっき  
ゃっと笑いころげていた。

その事件の後、ハリーはしばらく移民団  
の規則におとなしく従っていたが、あい  
にくそれは長続きしなかった。

川を渡ることになっていたある日、ハリ  
ーは明け方頃にこっそりテントを抜け出し、

その川を目指して出発した。ところが川まで2、3キロだろうと思っていたのが当てが外れ、昼になってようやく川岸にたどりついた。靴ずれから水ぶくれができ、疲れ切ってもいたハリーは、柳の木陰で眠ってしまった。あまりにぐっすり寝込んだためか、幌馬車がそばを通り過ぎて行った時にも、彼はそのまま寝入っていた。

最後尾の幌馬車が川を渡り終えて向こう岸に消えようという時、ハリーは目が覚め、岸に駆け寄って大声で叫びながら両手を振った。泳いで来いと声がかかった。ハリーは上衣と靴を脱ぎ捨て、川に飛び込んだ。

彼は川幅の七割かた泳いだところで力尽きたが、団長が馬を川に乗り入れて無事ハリーを助け上げた。岸にたどり着くと早速むちを受けたが、ハリーは神妙に叩かれていた。彼はこう書いている。「最悪な事態をよくも免れたものだと私は幸運を喜んだ。」姉のポリーは弟の姿が見えなくなって気も狂わんばかりだったのである。上衣と靴を無くしたのは重大事であった。ハリーは夜が来るたびに上衣が欲しいと思い、夜が明けてからは、一日中靴さえあればと思ったのである。

夜には、ハリーもその他の男や少年たちも幌馬車の下か脇の地べたに寝た。晩夏と



はいえ、夜気は冷たかった。幌馬車の中で女たちと寝ていたポリーが、暗くなってから自分のベチコートをはりに貸してやったが、ひんやりと湿った硬い地面ではたいして違いもなかった。ハリーは服以外に毛布1枚持たず、夜も昼もそれで通した。

ワイオミングで一度「バッファローの乾いた糞」を集めて火を起こし、横で縮こまって寝たが、久しくなかった暖かい眠りに就いたその明け方近く、目が覚めてみると体の上に4センチの雪が積もっていた。

ハリーは靴がないので、1,500キロ近くをはだして歩くほかはなかった。足はひびが切れ、割れて、日焼けと埃で黒くなった。のろのろ歩を進めるたびに、裂け目から血がにじみ出た。ちょうどサボテンの時期で、ハリーは空腹からサボテンを集めたが、取る時に鋭いとげが、ただでさえ痛む足に刺さってきた。ポリーがとげを抜きながら、ふたりで毎晩泣いた。ハリーは痛さから、ポリーは弟がかわいそうだという気持ちから。そしてその翌日は、また痛む足にとげが刺さったのである。

ハリーの足がもうこれ以上持たないという時、彼は馬の背に乗ったり幌馬車にもぐり込んだりした。つかまってむちで打たれたが、団長は「かわいそうなチビ」のために抜け道を見つけてくれた。長い道中でポリーに弟の服を洗わせる時、服が乾くまで人目につかないように馬車の中に入っている許可が出たのである。

ある川を渡る時、10歳の少女が歩いて渡らないですむように幌馬車の中にこっそりもぐり込んだのを見て、ハリーも真似することにした。ところが、その幌馬車が砂洲に乗り上げてしまい、ふたりの子供を乗せたままひと晩置き去りにされたのである。

ハリーはその夜、一番大事にしていた四つ刃のポケットナイフをなくしてしまった。イギリスで母のために買ったポケットナイフがブラット川に落ち、「二度と戻ってこなくなった」のである。ポリーは姿を消した弟の身を案じて、またも耐えがたい夜を過ごした。

渡河の際には、馬車に積んである砂糖袋が水に浸かって、汁が床のすきまからしたり落ちた。ハリーや子供たちは馬車の下に仰向けになり、甘いしずくをなめたり、指に取ったりした。あいにく口に入るくらいシャツやズボンにも落ちたが……。

ある時、夜間に行進することになり、へとへとになっていたハリーは馬車に隠れようと思った。空っぽらしい樽を見つけて中にしゃがむと、ひび割れだらけの足がどろりとした糖みつの中に10センチほどはまり込んで、ハリーはおもわずアッと、声にならない声をあげた。もうその糖みつの中で寝るしかなかった。

翌朝、頭の上から爪先まで糖みつにどっぷり浸かったハリーが馬車から姿を現わすと、黄色い笑い声に迎えられた。みつを落とす方法がなかったのでそのままみつだらけでいると、「やがて埃がついて乾燥して、幾分心地が良くなった。」

ハリーの頭髮は、イギリスからの船でもらったしらみのため、つるつるに近いほど短く刈られていた。ワイオミングのインディアン野営地近くで休憩した時、彼は初めてインディアンの平和のきせるの儀式に連れて行かれた。ところが、ハリーが何やら好奇的になったのである。ひとりのインディアンがハリーの頭をなで、「頭の皮がない」と叫んだ時、ハリーは飛び上がって逃げ出した。



移民団はソルトレーク盆地に通じる峡谷を下ってから、山麓にテントを張った。翌朝、白み始めるが早い一行は列を組んで出発したが、ハリーはパレードの楽隊長よろしく先頭に立った。人々が来たの幌馬車隊を見に出て来た時、ポリーはポロポロの服と日焼けした顔や髪が恥ずかしくて隠れた。ふたりに捜す人はいないようだったが、しばらくしてから、ハリーがなつかしい顔を見つけた。彼はその女性の服を引っ張り、「ねえ、お母さん」と言った。

女性はハリーを見下ろして、「おまえなの？ハリー。ポリーはどこ」と言った。3人はひとつになって泣いたが、母親は涙のあい間に時たま笑顔をこぼし、「この上なく幸せそうだった」とハリーは語っている。

(注)

ロバーツによるこの荒野の旅の回想は、ブッククラフト社刊、トルーマン・G・マドセン著 *Defender of the Faith*。「信仰の擁護者」より許可を得て転載したもの。

# 名前が何と変わっても

ジャネット・ブリガム

**私**が最初の日記帳なるものを買求めたのは、数年前、バージニア州アレクサンドリアのドラッグストアででした。値段は77セント、その店で一番地味な表紙のノートでした。その当時、私は自分が日記をつけ始めていることに気づいていませんでした。ただ自分の考えをまとめるための場所が必要だったのです。

それまで、私は紙切れがあれば何でも——什分の一の領収書や教会のプログラム、カレンダーの小さな余白に、思いついたことや自分の考えたことを書いていました。そのような訳で、書き留めておいた紙切れをなくしてしまうと、唯一の私の心の記録も失ってしまうのでした。そしてやっと、それをもっと長持ちするものに変える時が来たのでした。

私は字が書けるようになった頃から18歳に至るまで日記を書き続けてきました。けれども、その日記帳というのが手帳ほどの小さいものでしたので、たくさんのことは書けません。それに表紙の日記帳という言葉が、探検家の南極探検の記録のように、あまりにも高尚なもののように思われました。書く内容といえば、ああしたこうしたという

ことばかり、自分の考えなど書いたことがなかったのです。(典型的な例：きょうの歴史の試験は惨たんたるものだった。夜、同じフランス語クラスのマイクから電話があった)

およそ主情的な内容の見られないものでしたが、それでも日記に代わりはありませんでした。残念だったのは、大学に入ってからあまりに忙しくなりすぎて日記をつけられなくなったことです。

ですから77セントのノートを買った時も、日記のことなど頭にはありませんでした。ただ、日曜学校のいいお話の材料になる色々な考えが心に浮かんできてもすぐ忘れてしまうことにすっかりうんざりしていたのです。その初めてのノートに向かいながら、私は言葉が次から次に湧き出てくるのに夢中になっていました。私は夜、ノートに書くことを楽しみにするようになりました。時々は昼間メモにしておいて、夜それをノートにつけることもありましたが、また、夜が明ける前に起きて、着換えを済ませることにはこだわらず、そのまま5分から時には1時間も熱心にペンを走らせることもありましたが、幾つかのことを書いた日もあれ

ば、何も書かない日もありました。

私が値段の安いノートを好んだのには理由があります。それは、書き損じを心配しなくてもよかったのと、日常生活における自分の誤りを気軽に書くことができたからです。そのうち私は時間を決めて書くようになりました。同じ場所で——ソファーに腰を下ろし、明かりのそばで書きました。外側の余白には、新車を購入したことや我が家の猫が予防接種を受けた日付けといった重要な出来事を記録し、実際にノートとして使用する部分は、1日の自分の動きや見聞きしたこと、意見、感想などを書きました。

自分が日記をつけていることをはじめて実感したのは、何か月かたって、またあのドラッグストアに新しいノートを買いに行った時でした。私はノートに「ジャネット」という名前をつけることにしました。第1冊目の「ジャネット1」はまったく日記らしからぬものでした。日付けはほとんど入っていない上、毎日の生活や自分が感じたこと、考えたことは一切記録していなかったからです。私は自分が日記をつけているのだということを実感してから、せめていつ何を書いたかだけでもわかるようにとつけ方を変えました。

日記をつけた場所を記すのもまたおもしろいものです。どこに行っても、旅先や近くの友達の家でも、私はいつもの自分と変わりなく日記をつけました。

いつだったかある友達の家を訪ねていた時、私は日記に、霊性や情緒面の成長を促す隠れた力があることに気づきました。私は、福音について議論しがっていた哲学専攻の学生と何時間も論じ合った後、自分の信ずるところについて長々と書き記しま

した。それはまるで証を述べているようなものでした。その夜、私は日記を書いているうちに、自分が日記に対してどれだけ心を開き、また正直になっているかがわかりました。多分どの友達に対するよりも率直だったと思います。自分の思考能力や自己表現能力に失望して、このように書いたこともあります。「私の頭って、色々なゴミを吸い取った電気掃除機みたい。金の粉も入っている。だから私は袋のゴミをあげ、一つ一つえり分けていって金の粉だけが残るようにしなければならない。」

自分の考えを書き出すことは、それを分析するよい機会となりました。書いていて、自分の態度が利己心や誤った判断に基づいていることに気づいた時もあれば、妙案とわかってうれしくなったこともあります。

また、その日受けた精神的な痛手に対する自分の反応を声を出して笑っている自分に気づいたことも時々あります。一度などいやな1日だったのか、大きな字で「バカ」と書いたこともあります。

そのうち日々の記録に題名をつけることを始めました。私の好きな題名のひとつ、つまり好きな記録は、自分の信仰を強めようと努力していた時につけたものです。その題名は「疑念が忍び込む、ジャネットは払いのける」。落ち着いた態度を反映している題名も幾つかあります。そのひとつがジャネット3の中の「昼と夜と私の好きなもの」です。1節御紹介しましょう。

「私は冷気を感じる澄んだ夜が好き。そんな夜、私は星空の下で声高らかに語る。私は早朝が好き。東の空が白む頃、起床し、はつらつとして戸外に出るのが好き。ちょうど心の準備ができた新しい始まりが好き。清潔なシャツ、清潔なガウン、清潔な身体、



清潔な髪、それは幸福の基、自分の心が希望に満ちあふれている時、私は人々を愛することができる。」

私の心はいつも希望でいっぱいという訳ではありません。落胆することも時々あります。そのような時、私はあの9月の夜に書いた、気分を爽快にしてくれる一文を振り返ります。そしてその一文のすぐ後に書いたもうひとつの文から励ましを得るのです。「自分が何を切り抜けようとしているのかわかれば、忍耐するのはより容易になる。」

日記のどれもが深みというかおもしろみがあるわけではありません。しかし、一つ一つがそれなりに日々の福音との対話であり、自己との闘いであり、新たな生活の発見の喜びの跡なのです。一つ一つの経験の積み重ねによって、より確かな物の見方ができるようになります。個々の記録は、私の人生の単なる反映にとどまらず、私の人生そのものに影響を及ぼしつつ人生を形造っているのです。

ジャネット4をつけていた頃、大の親友が引っ越した時に、私は「悲しい。とても書く気になれない」と書いています。そしてジャネット5には、親友を傷つけた思いやりのない手紙を書いた後でしたが、このように書いています。「いろいろな混乱させる声が心に鳴り響く中で、ひとつの穏やかな声が心の中いっばいに広がり、すべては取るに足りないことになると告げている。」この穏やかな声のことを書いてからも、私は一層注意してその声に耳を傾けました。そして、その声は正しかったのです。私が後で親友に許しを願い求めた時、親友はとうに許してくれていたからです。

ある日、私は人生に<sup>ほん</sup>ほしさを感じて、ひとつのことを始めました。それは今では習

慣になっています。私は「感謝していること」という題で書きました。今でもそうなのですが、書いていて私は驚きました。自分は何と様々の、また数多くの祝福を受けているか、それに比べて試しがどんなに小さく、時にはユーモラスであるかに驚いたのです。

東部から西部に移る時も、休暇の時も、調子の良い時も悪い時にも、日記は本棚やスーツケースの中にあって聖典と共にいつも私の友でした。

日記をつけ始めた時は、自分が心の中で深く考えていることをきちんと記録するつもりでいました。聖餐会の話割り当てられた時に役立つと思ったのです。そのために日記を使用したのは一、二度ですが、決して十分に役立つとは言えません。日記は私の人生の百科事典でもなければ地図でもありません。日記は状態を示す表ではなく、たとえぞんざいではあってもダイナミックなアートワークなのです。

ジャネットシリーズは、よく続いて15冊にもなりました。1年にわたって書きつづったものもあれば、数カ月で書き終えたものもあります。15冊全部を読んだ人間は私ひとりです。少なくとも数十年はこのまま残しておくかもしれません。安いノートを卒業して、硬表紙の無罪の日記帳を使うようになってからも何冊かになります。実を言うと、この前、私は皮表紙の日記帳を買いました。(セールだったんですよ)でも買う時はついぶん迷いました。表紙に「日記」と書いてあったからです。

☆

☆

リチャード・オルソンがこんな話をしてくれました。「アリゾナのツーソンの学校で、8年生になったばかりのことです。それは確か、数学の時間でした。僕のほかに4人の友達がいる、ある日、だれだったか自分で作った迷路パズルを持ってきたんです。それがきっかけとなって、だれが一番面白いパズルを作るかコンテストが始まりました。しばらくすると、ほかの4人は興味を無くしたようでしたが、僕はそうでもなかったんです。

それから僕は、家でパズルを作って学校へ持って行くようになりました。友達の中には、面白がって写す者もいました。そういうのを見ると僕もますます得意になって、いくつもいくつも作りました。

パズルを作りたくなると、僕はだ抵座って、今まで見た映画や読んだ本、または何かいいアイデアになりそうなものについて考えるんです。学校時代はずっと、美術を取っていましたが、パズル作りにはあまり効果をおよぼさなかったようです。僕は、特に長い迷路を書くのが好きで、終わりの方でやっと正しい道が見つかるようにする

んです。でも、大抵は、ただ座って書き始めると書いているうちに自然とアイデアがわいてきます。」

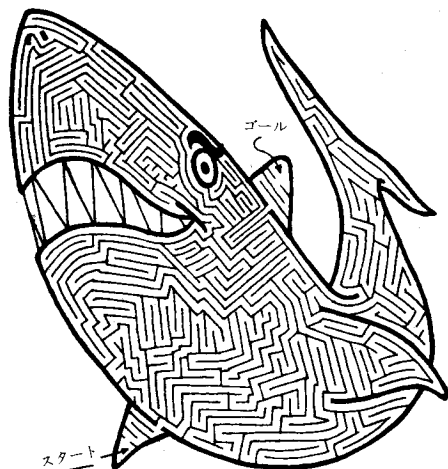
さて、リチャードの作った迷路パズルを本にして出版し、伝道資金に当てたらということをおもいついたのが彼の父親だった。続けてリチャードは述べている。「僕は、お金は全部伝道のために使うことを主に約束しました。最初のうちは本の売れゆきはよくありませんでした。でも、だんだん注文が増えて、印刷が間に合わなくなったほどです。」ちなみに、現在までで彼らは1,000部以上を発行している。

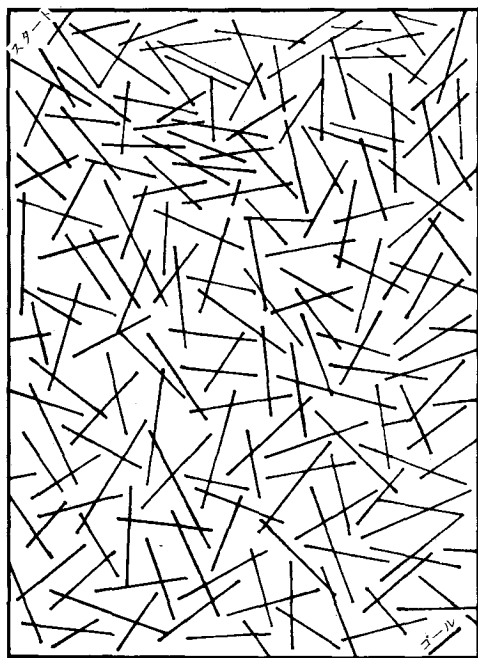
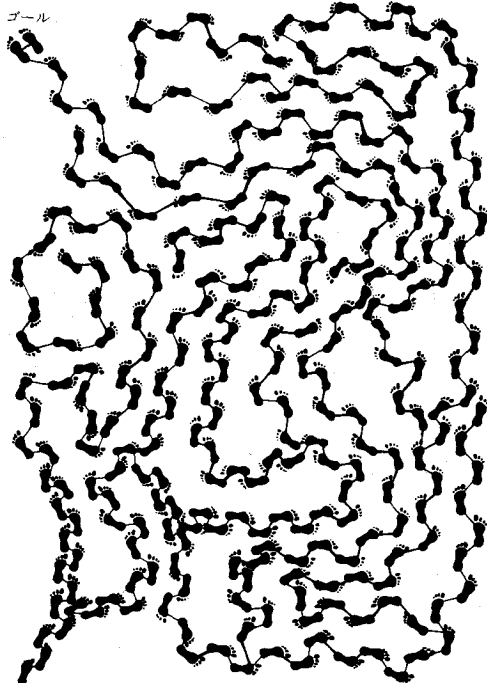
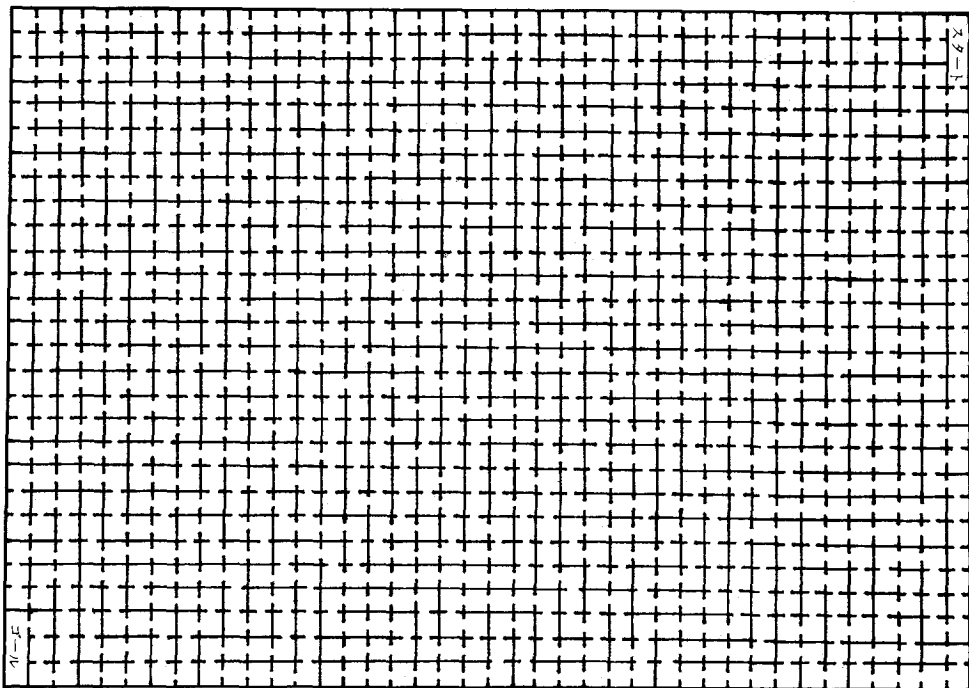
今リチャードは、テキサス州サン・アントニオ伝道部で伝道しており、パズルは前ほど彼の興味を引くものではなくなった。彼は、こう語っている。「伝道をしていると、そんな暇もありません。何しろ、迷路はひとつ作るのに2時間も3時間もかかるんですから。それに、今はもっと大切なことがたくさんあります。」しかし帰還後、リチャードはまた面白いパズルを作って私たちを楽しませてくれることだろう。

以下に、彼の傑作を少し紹介しよう。

## 迷路パズル

マックスウェル・T・ストーン





# 厳しくも快い戒め

ニール・A・マックスウェル

**私**は結婚前の純潔と結婚後の貞節に関する規準を、少し違った見地からとらえてみたいと思います。この規準はすべて、十戒の中でも最も人気のない、しかし厳しくも快いあの第7番目の戒めの一部をなすものです。

この第7番目の戒めは、日常生活の中であまり話題になることはありません。しかし最も守られていない戒め、また私たちが最も必要としている戒めはこれなのです。またこの戒めは、人間の行動様式に関するごく基本的な問題で、末日聖徒イエス・キリスト教会が世間一般とどれだけ異なっているかを示す格好の例と言えます。世の人人は、その人が何か他の面で目に値するものを持っていると、この戒めを守ってよいがいまいが問題にしません。

私が長い間信じ続けてきたことがあります。それは、私たちの心の奥の奥のことを考えてみた場合、最もむずかしい教義が最も偉大な真理であり、したがって最も貴重な原則となるということです。しかしこの原則は、偶然に見いだせるものではありません。ペテロが約束しているように、従順

であって初めて、祝福と新たな知識が得られるのです。正しい原則に従うことにより理解が深まるわけです。(IIペテロ1：8参照) 第7番目の戒めの場合、まさにこれがあてはまります。

兄弟姉妹の皆さんに率直に申し上げますが、私たちはもっと良い世界に住む備えを今からする必要があります。この世での生活は非常に大切ですが、永遠という見地からすればほんの一瞬にすぎません。私たちがこの欠点だらけでめまぐるしく移り変わる世の中にもあまりにも速く溶け込みすぎると、それが来るべき永遠の世界への適応を妨げることになります。第7番目の戒めを破る人が「思慮がない」と言われるのは無理からぬことです。(箴言6：32参照)

もちろんこの戒めに関連することで、世の人々も私たちも共に懸念していることは幾つかあります。まず第一に性病の問題、次にいわゆる未婚の母の問題、三番目が性的な不道徳が結婚生活や家庭生活に影響を及ぼし、離婚が増加しているという問題です。

確かにこの3つの問題は重大ですが、主

の王国である教会が第7番目の戒めを守る理由は、幸いにももっと高い次元のものです。

純潔についてのあらゆる律法を守る第一の理由は、神の戒めを守るということにあります。ポテパルの妻の執拗な誘惑を退けたヨセフは、その理由をはっきり理解していました。(創世39:9) 主人であるポテパルに忠誠を尽くすのが道であることを知っていた彼は、「どうして……神に罪を犯すことができましょ」と言いました。ヨセフ



堕胎は不貞と同様、「深い傷を負うたように心が痛み悲しんで」死ぬ人を多く生み出す。

この従順さは、自分自身と自分の将来の家族、それに主人であるポテパルそしてポテパルの妻に対してさえ忠誠を尽くす結果になったのです。

従順さが重要な鍵を握るもうひとつの大きな理由は、第7番目の戒めを破ることに

より私たちから聖霊が逃げてしまうということです。聖霊は私たちの伴侶として大きな力を持っていますが、汚れた人には住むことができないので、その力が失われてしまうのです。聖霊の力が失われれば、私たちは人のために自分を役立てるということが少なくなり、また感受性も鈍くなります。そして能率のよい働きもできなくなり、人を愛する気持ちも次第に失われてしまいます。言ってみれば、本当に必要な時に主のみ業を行なうことができないということです。

性的な不道徳が危険であるもうひとつの理由は、私たちの心を鈍らせてしまうという点にあります。皮肉なことですが、好色というものは、自分は感受性が鋭いのだと思込んでいる人から真の感受性を奪ってしまいます。そして3つの神権時代の予言者が異口同音に語った「主を思い起すのは遅い」者になってしまうのです。(1ニーファイ17:45, エペソ4:19, モロナイ9:20)

ノーマン・カズンズはこう警告しています。「何でも見てやろう、何でもしてやろうと思っている人は、何も感じなくなるという危険を冒している。……これを理解していないと、私たちに内在する最も高度な反応が影を潜めてしまう。」(『何でも見、何でもするが、何も感じない』Saturday Review 「サタデーレビュー」1971年1月23日付, p.31)

感じる力がなくなるのは、私たちの霊の感じる能力が破壊されてしまうからです。私たちが目指すより高度な世界の属性である洗練さ、上品さ、また思いやりを感得す

る力が鈍るのです。

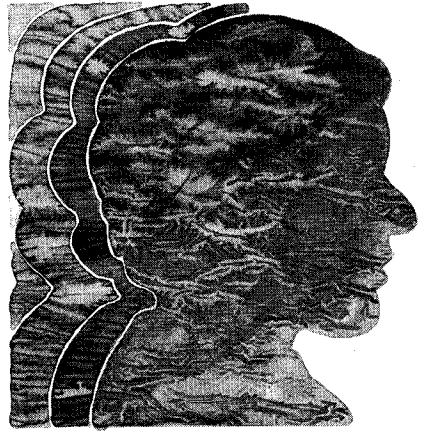
私利私欲のかたまりであるこの社会は、人生を「身軽に」生きることを提唱する傾向にあります。利用価値のなくなった友人、親戚、そして親も、お荷物になりそうなものは捨ててしまおうというのです。この自分と関わりのあった人々を次から次へと捨て去っていくという態度は、利己心の末期的の症状で、この段階に入ると人は、我慢しなければならないようなものはあえてしようとせず、またいかなるものとも関わりを持たずに生活しようとします。

第7番目の戒めを守ることの根底にあるもうひとつの理由は、この戒めを破ることが自分自身への評価を低くしてしまうということです。なぜならこの戒めに反することにより、私たちは自らの本性に対して罪を犯していることになるからです。(Iコリント6：18—19)これは私個人の意見ですが、私たちはこの戒めを破ることにより自己に対する評価を下げてしまうにとどまらず、前世において私たちの心にかすかに、しかし決して消えることなく刻まれた約束にも反旗を翻すことになると思います。

性的な不道徳は、自分だけでなく他の人にも重大な影響を及ぼします。不貞を働いていながらひとりよがりの考えを持ってきて自己弁護をする父親は、そうした自分の態度が妻子にどれだけの影響を与えているか知らないのです。

18年前のことですが、私はユタ大学のキャンパスに近いある学生ワード部の監督をしていました。その時ある若い夫婦に問題があり、いろいろ説得を試みましたが結局だめでした。妻の方が不貞を働いていた

のです。調べてみると彼女は、淫乱な父親のもとで少女時代を過ごしていました。もちろんそれをもって彼女の罪が正当化されることはありませんが、彼女は幼い頃から知らず知らずの内に形成されてきた男性像をもって自分の夫と接していたのです。彼女の夫に対する行為には愛はありませんで



私たちの心が悪で満たされれば、そこにはもはや神と同胞への真の愛の入り込む余地はない。

した。監督の職を解かれて数年後、私は彼女が売春の罪で逮捕されたことを新聞で知りました。私は今、彼女がどこにいるか知りません。しかし私の脳裏に焼きついて離れないのは、不実な父親たちが子供に悪い手本を見せてその信用をなくしたというヤコブの言葉です。(モルモン経ヤコブ2：35)

同様に、未婚の状態のままで同棲している若人もまた、家族中心であるはずの生

活に大きく違背している人々です。この違背行為が私たちの社会にどのような結果をもたらすかは、後の世代に明らかになることでしょう。フランスの哲学者ペインビルはこう警告しています。「人は自分が欲したものの結果を甘んじて受けなければならない。」



これらの偉大な真理を肌で感じ取らない限り、私たちは一時の衝動や欲望のために獄に入れられ、そこで自らの罪を衆目にさらさなければならなくなるのだ。

私たちの基本的な価値が相互に作用し合うように、私たちの基本的な組織も相互に関連し合っています。家庭を墮落させておいて、それでいて良い政府を望むことはできません。たとえば戒めは守らなくともよいのだという態度を取ったとします。そうすると混乱が起こります。親は横領を正当化し、成長した子供は姦淫を正当化し、孫は裏切りを正当化するかもしれません。不従順が悪いことでなくなれば、だれもが率

先して戒めを破るようになるでしょう。

こうした懸念は、世の人々の性病や妊娠に対する懸念をはるかに超えたものです。しかしパウロが述べているように、教会は確固たる「真理の柱、真理の基礎」です。（Iテモテ3：15）教会の場合、この第7番目の戒めに従っているか否かは、指導者と会員との間の面接によって判断されるのが普通ですが、この戒めに従うことはこの世と一線を画することを意味するものです。またこれは初めから計画されていたことでもあります。

性的な不道徳というこのはなだしい罪は人の感性を鈍くしてしまうものですが、この罪がもたらす害悪がもうひとつあります。それは、次第に人から希望を奪い取っていくということです。希望が去った後に来るのは絶望です。ある予言者はこう述べています。「絶望は悪い行いから来る。」（モロナイ10：2）このように、絶望と悪い行いとの間には恐るべき相乗作用があるのです。

ウィル・デュラントとエアリエル・デュラントは、人類の輝ける歴史に関する彼らの著作の中で、性を火の川になぞらえています。100の規制によって堤防を築き、この火の川を冷やさなければならない、そうでなければ個人であれ団体であれ滅ぼされてしまうと言うのです。

ではこの話の結びとして、私自身が気づいたことを少しあげてみることにしましょう。

1. この世の誘いに乗らないようにしよう。あなたが模範を示せば他の人もそれに従う。他の人の態度の変わり方は時として

驚くほどである。

2. だれでも泥足で家に入られたらいやである。同じように、あなたの心にも汚れたものが泥足で入って来ないようにしなければならない。

3. 貞潔と平和な家庭とをひとつの絆で結びなさい。そしてその絆が祖父母から父母、子、孫へと続くようにする。絆を強くするには、強力な接着力を持つ接着剤が必要であるが、それは、あなたが行ないを通して、自分の周囲の世の中で何が起きている、第7番目の戒めを信ずる自分の気持ちに変わりはないということを断言することである。

4. いわゆるフリーセックスを容認する人々と共に時を過ごさない。これはあなたが彼らにとって標準が高過ぎるからではない。あなたが彼らに対抗できるほど強くないからである。たとえ善良な人であっても、状況が悪くなれば負けてしまうことがあることを忘れないようにしなさい。ポテバルの妻から逃れたヨセフは思慮分別があっただけではない。逃げ足も速かった。

5. 女性を食い物にする利己的な男は昔からいたが、今は、男性を食い物にする利己的な女がいる。しかしどちらも情欲に駆りたてられ、誤った自由の感覚を身につけている。これは、カインがアベルを殺すことによって得た空虚な自由と同じものである。カインが「われを妨ぐる者なし」と語ったのは皮肉なことである。(モーセ5:33)

6. たとえ過ちを犯してしまっても、悔い改めという輝かしい福音があることを忘れてはならない。罪を真剣に悔い、必要な

ステップを踏むすべての人々に、赦しの奇跡は訪れる。しかし赦されるためにはまず、魂が恥という煮え湯を飲まなければならないことを心に留めなさい。傷口は洗い清めてこそ初めて癒えるのである。悔い改めの道はそこにある。

7. 悪いことを行なおうという衝動に駆



世の人々は、その人が何か他の面で一目に値するものを持っていると、この戒めを守ってようがいまいが問題にしない。

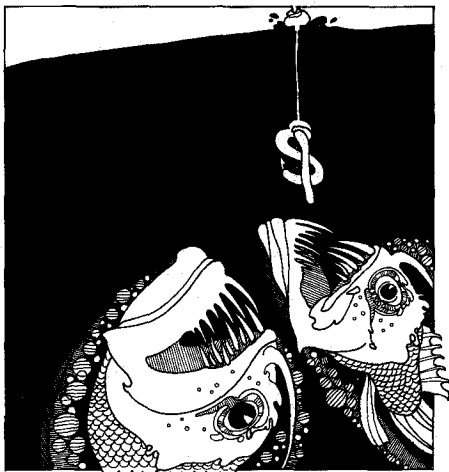
られた時は、その衝動が弱く意志がまだ強い内に抵抗しなさい。引き延ばせば意志は弱く衝動は逆に強くなるだろう。熱心に良いことをするようにしなさい。なぜなら怠惰になると、人は自分を喜ばせることだけを考えるようになるからである。

8. 私たちはこの世の罪を軽べつしなければならぬ。世の人々を軽べつすることは良くない。彼らは愛さなければならぬ。しかし、世の罪は非難して然るべきである。



この世に対する軽べつと嘲笑は、この世の罪から遠ざかることである。福音を恥としなかったヤコブはこう勧告している。「不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないのか。」(ヤコブ 4:4)

#### 9. 誤った生活を送っている人々にあな



女性を食物にする利己的な男は昔からいたが、今は、男性を食物にする利己的な女がいる。しかしどちらも情欲に駆りたてられ、誤った自由の感覚を身につけている。

たの生き方を決めさせてはならない。なぜなら性的な関係を結んだことを自慢する者は自分を征服者のよう思っているかもしれないが、本当は逆に自分が征服されたことを自慢しているに過ぎないからである。

私たちは性的な不道徳がもたらす害悪を避けることにより、戒めを守る人に常にもたらされる祝福の糸口をつかみ、そしてそれを自らのものとすることができます。第7番目の戒めを守る人には以下のことが約

束されているのです。

A. 神と神の律法に調和した生活が送れるようになる。

B. 従順になることにより私たちがどのような可能性を持っているかがわかり、その可能性に向かって進めるようになる。福音は私たちが何者かを教えてくれるだけでなく、どのような者になる力を具えているかも教えてくれる。

C. 自己を尊ぶ気持ちを持つようになる。

D. 情欲という最も暴虐な反逆者から自由になることができる。

E. 欲望のままに生活するのではなく思慮分別をもって行動することにより、自由意志の範囲が広がるのに気づくようになる。

F. 悪を退け善を選ぶ時は常にそうだが、急速に人格が高められる。ただ罪にふけらないというだけでは十分ではない。私たちは義に飢え渴かなければならないのである。

G. 以上に加えて、高潔な人格を得るという祝福がある。この祝福により人は完全な者となり、だれに対しても恐れを抱かなくなる。

愛する若い友人の皆さん、イエス・キリストの戒めからそれれば、私たちはキリストに従う者ではなくなります。真のクリスチャンである私たちがなすべきことのひとつは、第7番目の戒めを守ることです。既婚未婚を問わず、この戒めを守らなければ本当の喜びは得られないということを自覚していただきたいと思います。イエス・キリストのみ名により祈ります。アーメン。

## ◇ニュース◇

### トピックス 世界に広がる教会

- \* メキシコ神殿は2月に基礎工事を終了、ジョーダンリバー神殿は工事の半分を終え、今年中頃までには完成する。
- \* モルモン経がフィジー語に翻訳された。これで英語以外のモルモン経は44となる。
- \* カリブ海の島々で初めてのステーキ部

が、ベンソン会長によりプエルト・リコに設立された。

- \* ハワイ神殿訪問者センターの全面改築が終わり、代表役員であるアドニー・Y・小松長老により再献堂された。一日平均千人が当センターを訪れるが、その内85パーセントが非教会員である。

## 地域幹部書記井上龍一兄弟 伝道部長に召される

現在菊地良彦長老のもとで地域幹部書記の任にある井上龍一兄弟（東京東ステーキ部鎌ヶ谷支部所属、37歳）が、伝道部長に召された。東京南伝道部に赴任する。井上兄弟は東京都江東区の生まれ。1966年に東京西支部（現東京第3ワード部）でバプテスマを受け、当時支部長であった菊地長老から確認の儀式を受けた。同年成蹊大学政治経済学部を卒業後、1972年からは教会教育部地区主任として活躍してきた。教会では長年MIA指導者として日本の教会の発展に貢献、その

後26歳の若さで東京第3ワード部の監督に召された。以後高等評議員を務め、1979年7月1日から菊地良彦長老の幹部書記として現在に至っている。

東京都豊島区出身の礼子姉妹とは、1967年に菊地長老の司式で結婚、同年ハワイ神殿で結び固めを受けた。礼子姉妹はワード部やステーキ部の初等協会、扶助協会で活躍、現在東京東ステーキ部扶助協会副会長の任にある。御ふたりの間には、10歳と8歳のお嬢さんがいる。



井上兄弟御家族

# 東京インスティテュートの開校

—教会教育部から—

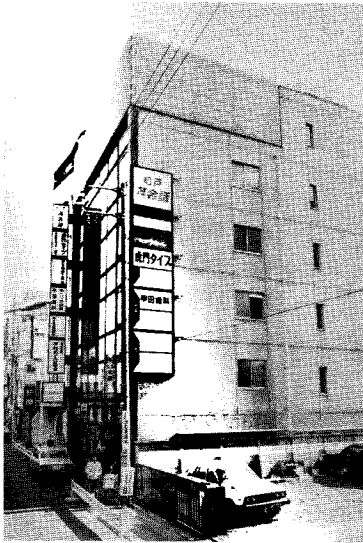
教会教育部は4月13日より東京インスティテュートを開校することになりました。場所は国電渋谷駅より徒歩約3分という恵まれたところですよ。〔所在地・渋谷区桜丘町3-4、黒川ビル4F、電話(03)496-6954〕

以下に建物の写真と地図を紹介します。

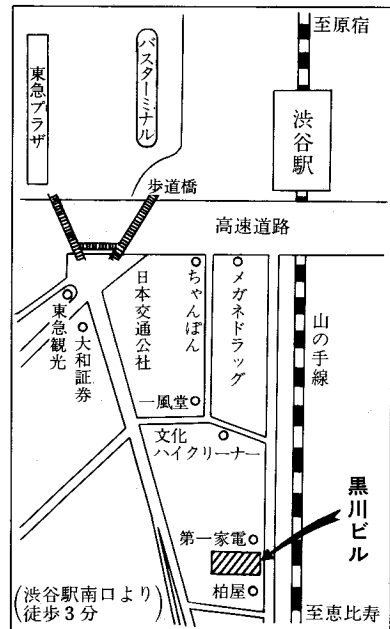
18—25歳のすべての独身の兄弟姉妹はインスティテュートの受講対象者ですのでぜひ登録して下さい。なお、今春東京の大学や各種学校に入られた方々は特に全員、登録するようお勧めします。

次ページにはインスティテュートの時間割があります。お好きなコースをお選び下さい。

不明な点やお聞きになりたいことがありましたら上記のところへお尋ね下さい。



写真は黒川ビル全景、開校場所はこの4階。



[インスティテュートの時間割]

曜日	時間	午後1時—2時半	3時—4時半	5時半—7時	7時10分—8時40分
月		345コース	211コース	/	
火		122コース	411コース	324コース 60コース	345コース 211コース
水		121コース	345コース	130コース 122コース	345コース 60コース
木		130コース	324コース	345コース 121コース	122コース 345コース
金		345コース	121コース	345コース 411コース	324コース 130コース

[コースの内容]

60……日の光栄の結婚

211……四福音書の比較

411……イエスのたとえ話

121……モルモン経ニューファイ第一書  
—モルモン言

122……モルモン経モーサヤ書—アルマ書

130……宣教師への備え

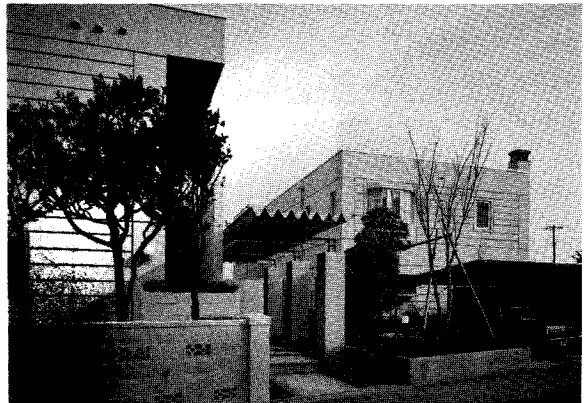
324……教義と聖約第1章—42章

345……歴代大管長

(1981年度個人学習と同じ)



## 東京北伝道部 新装なる



このほど、東京北伝道部の建物が新しく造られ、今までの地域管理本部ビルから移転した。

新しい建物は、東京第2ワード部の敷地内に建てられ、プレハブ2階建ての本部と、

それに隣接する伝道部長宅からなっている。  
なお、所在地と電話番号は以下の通りである。

〒161 東京都新宿区西落合4—25—12  
TEL (03)952-6802, 6803

# ウィンターカーニバル



日本における伝道80周年を記念して、名古屋ステーキ部、名古屋西ステーキ部合同のウィンターカーニバルが、2月11日より13日まで岐阜県流葉スキー場において催され、参加者80余名、テーマ“ころんだ、たてた、すべれた”のもとに盛大に繰り広げられた。

大会中、インストラクターによる『モルモンズスキースクール』、白銀の世界の中での『バレンタインダンスパーティー』、童心にかえっての『雪上運動会』、“ああ、結婚” “進化論をぶっとばせ”のテーマの2つのセミナー、心の通うグループ内での交歓会、証会など、数々のプログラムがもたれ、参加者は共に楽しい3日間を過ごした。

## 「聖徒の道」原稿募集！

「聖徒の道」編集部では広く日本全国の兄弟姉妹からローカルページの原稿を募集いたします。福音に対する証、トピックス、何でも結構です。このページを日本全国の兄弟姉妹が互いに証を強め合う場としたいと思います。どしどし原稿をお寄せ下さい。要項は以下の通りです。

- 字数 400字詰原稿用紙（横書き）5枚以内
- 宛先 〒158 東京都世田谷区上用賀4-9-19  
東京ディストリビューション・センター  
「聖徒の道」編集部

できましたら写真を添えてお送り下さい。またスペースの関係で採用できないもの、また採用のものでも編集部で添削をさせていただく場合がありますので、あらかじめ御了承下さい。

## 愛ある家庭づくりをめざして

日本鹿児島地方部  
谷山支部

安庭 徹

1980年12月6日、肌寒い夜に私たち家族5人はバプテスマを受けました。宣教師の訪問を受けてから8カ月目です。本当に長い間、いろいろな方にお世話になりました。私がモルモン経を手にしたのは、奄美群島のひとつの島「喜界島」というところです。1975年の8月から県の農業改良普及員として喜界町に駐在していました。

農業改良普及員という仕事は、小さな農業技術を媒体として、普及員と農家とがお互いを見つめ、高め合う人間改革の遠い道のりではないかと思われまふ。その潤滑的な存在としての「焼酎」を、私は神様と言って良い位愛していました。出会いの酒、心意気の酒飲みが連日連夜のごとく続きました。このことは長い間普及員生活の信条として、妻や子供たちにも理解してもらえるものと考えていたのです。島民との心の触れ合いもうまくいき、この燃える情熱を仕事に打ち込むことのできる自分、またこの島から離れたくないほどの愛着が生まれ、島に同化していく自分に心から満足していたのです。ところがどうでしょう。仕事の成果も上がりつつあり、任期もあと1年となった頃、酒を飲んだ後にたびたび心臓発作が起こり、終日苦しい思いを経験するようになったのです。県外の視察先で発作が起こり病院へ運ばれた時は、死の不安さえ

感じたほどでした。何回となく病院へ足を運びましたが原因がわからず、ただ「発作性心ばく症」という診断名が書いてあるだけでした。みじめな自分、この情ない姿の自分を鏡で見つめながら、なぜこのように仕事を愛し、島民を愛し、仕事の成果も出ようとしているのに、このような苦しみを受けなくてはならないのかと自問しました。答えが得られないまま日々を悶々と過ごし、酒なしの人間関係は急速に冷えていくかに見えました。アル中寸前でしょうか。焼酎を飲まなくてはのどが渴いて眠れない日も多く、奇妙な幻影や夢に悩まされることもたびたびでした。

そんなある日、町の中央公民館を訪れ無表情に本棚を見つめていたら、その中の1冊の本が私の心を強くとらえました。まさ



安庭兄弟御家族



に1冊の本との出会いです。「われ島<sup>しま</sup>人<sup>ちゆう</sup>を愛す」という本でした。親しみやすいタイトル、著者は徳之島出身で県の職員です。仲間意識もつものり、一気に読み通しました。『われ島人を愛す』というところを読みながら、思わず涙をポロポロこぼしてしまいました。一体この本は何だろうか。真理の追究と人生の目的が手に取るようにわかるのです。コピーをとり1カ月位繰り返し繰り返し読みました。よし断酒だ。これ以上、酒とのつきあいは家庭を減らし心身を減らす悪魔の道のりだ。本当にこの1冊の小さな本で救われました。「いかなる成功も家庭の失敗を償うことはできない。」妻よ子供たちよ、長いこと申し訳なかった。これからは愛ある家庭づくりに努力しよう。仕事への情熱の半分を家庭に注ごう。このようにして妻や子供たちに心からわびたのです。長男創一の小学入学式の日を断酒日として以来、酒はわが家から姿を消しました。この私に与えてくれた出会いの本の著者は、冷水支部の現支部長さん牧兄弟です。さっそくモルモン経を送ってもらい読みました。世にも不思議な真理の書でした。ジョセフ・スミスの記録の中で「あなたがたのうち、知恵に不足している者があれば、その人は、とがめもせず惜しみなくすべての人に与える神に願ひ求めるがよい。そうすれば与えられるであろう」という新約聖書ヤコブの手紙第1章5節によって、天父と御子にあいまみえた驚くべき経験や、末日に聖書とモルモン経とがひとつに合わされる予言、またひとりの天使が永遠の福音を携えてくるという聖書の予言が成就されたことなどから考えて、心からこれは本物だと思いました。私の健康も少しずつ良くなり、無事、島での務めを終え、谷山のふ

るさに帰ってきました。希望と不安の中、冷水の教会を訪れました。スキンシップと言うのでしょうか。ニコニコ顔の教会員から握手せめにあい、驚き恐縮した次第です。教会らしくない教会、これは牧師の説教がなかったからでしょうか。若さと明るさを感じました。家族を大切にする教会、家族一人一人の才能を高め合う家庭の夕べなどの実践は他のどの教会にもないプログラムでした。愛ある家庭づくりは心をひとつとした家族としての信仰がとても大切な気がします。これから家庭の夕べをわが家の家庭教会として充実していきたいと考えています。

さて、家族そろってバプテスマを受けるということは大変なことで長い準備の期間が必要でした。妻や子供に対するアドバイスはもちろん、知恵の言葉や什分の一献金などの数々の戒めなどを生活に採り入れてみました。信仰の弱い情ない時もありましたが、神様は常に良き導きを与えてくれました。子供たちは神様の子です。心から神様を信じています。何よりもうれしかったのは、妻の決断でした。アロン神権を受け、私自身の手で妻や子供たち一人一人にバプテスマを授けた時は、感激で胸が一杯でした。苦しかった喜界島の思い出がよみがえってきたのです。帰りに讚美歌「家庭の中に」を歌いました。気持ちよい涙がこぼれました。喜びの涙でした。これからどんな逆境の時でも、この家族のきずなをしっかりと結び、神の武具を身につけ、日の光栄の王国で家族そろって生活できるよう、その日のために準備をしなくてはなりません。この証をイエスキリストのみ名によていたしました。アーメン。

浦和ワード部

付属図書館

